

青森県埋蔵文化財調査報告書 第185集

三内丸山(2)遺跡Ⅳ

平成6年度

青森県教育委員会

正 誤 表 (三内丸山(2)遺跡Ⅳ)

ページ・行	誤	正
P 3、4 行	南側	南西側
P 4、4 行	堀立柱建物跡	堀立柱建物跡
P 5、24 行	これまで～	本調査地区内では、これまで～
P 10、5 行	四区	4 区
P 10、6 行	(図 2) ～	(図 3～23)
P 15、14 行	～一部は木根～	～一部は、木根～
P 15、15 行	～によって明確に～	～によって、明確に～
P 16、17 行	～掘糸匠痕・	～掘糸匠痕、
P 16、18 行	～施文・24～	～施文、24～
P 20、1 行	～ (図10～74)	～ (図10～14)
P 37、1 行	～ (図24)	～ (図24～32)
P 37、6～7 行	～縄文時代後期(十腰内 I 式)で、厚さ 2 m 以上である。	～縄文時代前期及び後期(円筒下層 d 式、十腰内 I 式)である。
P 50、1 行	～ (図34)	～ (図33～35)
P 61、28 行	～後期(十腰内 I 式)で厚さ 2 m 以上である。	～後期(円筒下層 d 式、十腰内 I 式)である。
P 62、4 行	～運動公園拡張事業に係る～	～運動公園拡張整備事業に係る～
P 62、20 行	土坑 1151 基	土坑 1,151 基

序

本書は、県総合運動公園拡張事業に伴い、平成6年度に実施した青森市三内丸山(2)遺跡の試掘調査の結果をまとめたものです。

試掘調査の結果、本遺跡は縄文時代早期から晩期・平安時代の複合遺跡であることが明らかになりました。特に縄文時代中期の大規模集落であることが判明しました。

本書は、試掘調査の成果をまとめたものにすぎませんが、今後の埋蔵文化財の保護と研究に役立てれば幸いです。

最後に、調査及び本書作成に尽力いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

青森県教育委員会

教育長 佐々木 透

例 言

- 1 本報告書は、平成6年度に青森県埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施した、県総合運動公園拡張事業に係る三内丸山(2)遺跡の試掘調査報告書である。
- 2 本報告書の執筆及び編集は、成田滋彦・上野茂樹・内海剛が担当した。
- 3 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 4 土層の注記は、「新版標準土色帖」(小山・竹原1979)を参照した。
- 5 石器の石質鑑定は、青森県埋蔵文化財調査センター調査第二課主査伊藤昭雄に依頼した。
- 6 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複写したものである。
- 7 引用・参考文献については著者名と西暦年で示した。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。

また、図中で表したスクリーントーンの表示は次のとおりである。



ス リ



凹



タタキ

目 次

第1章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯と調査経過	1
第2節	調査要項	2
第2章	遺跡の概要	
第1節	遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2節	遺跡の層序	5
第3節	調査の方法	6
第4節	遺物の分類	6
第3章	調査の概要	
第1節	A区の検出遺構と出土遺物	10
1	検出遺構	10
2	土器	20
3	石器	21
第2節	B区の検出遺構と出土遺物	37
1	検出遺構	37
2	土器	37
3	石器	44
第3節	C区の検出遺構と出土遺物	50
1	検出遺構	50
2	土器	50
3	石器	50
第4節	D区の検出遺構と出土遺物	53
1	検出遺構	53
2	土器	56
3	石器	57
第4章	まとめ	
	抄録	
	写真図版	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と調査経過

調査に至る経緯

この遺跡は、昭和51年度に県総合運動公園整備のための西駐車場の建設に伴い、青森県教育委員会による発掘調査が実施されている。

その後、県土木部では、県総合運動公園の拡張整備事業を計画し、予定地内に遺跡が存在することから、土木部と教育庁文化課は数度に渡る協議を行い、平成4年度から新野球場部分に係る発掘調査を実施することになった。

平成5年度、新野球場建設予定地の南側台地にサッカー場の建設計画のため、教育庁文化課は土木部と協議を行った。その結果、サッカー場建設予定地が広大な面積に及ぶため、発掘調査を実施する前に遺跡の範囲及び性格を把握する必要があり、平成6年度に試掘調査を実施することとした。

調査経過

三内丸山(2)遺跡(サッカー場部分)は、平成6年4月4日から試掘調査を開始した。試掘調査区をA-D区と4区に分割し、A区から調査を実施した。なお、調査区のグリッドは、野球場の基準杭を基にして設定した。

4月中旬からA区に2m幅のトレンチを設定し調査を進めたが、A1トレンチからA11トレンチまでの各トレンチから、遺構と思われる多くの落ち込みが確認された。また、A4・6・7・8・10・11トレンチに泥炭層が存在することが判明した。II層を中心に土器・石器の遺物が出土した。

6月上旬からB区の木伐採が行われ、伐採後4m幅のトレンチを設定し調査を進めたが、遺構と思われる落ち込みはB1・2・3トレンチに集中、B7・8トレンチでは泥炭層を確認した。

7月上旬からD区に4m幅のトレンチを設定し調査を進めたが、遺構と思われる落ち込みの他、D3トレンチから配石遺構が、D4トレンチから盛土状遺構がそれぞれ確認された。

8月上旬からC区に4m幅のトレンチを設定し調査を進めたが、自由広場は、表土が掘削されず、盛土を施して建設されていたため、遺構や遺物が残存していることを確認した。C区に関しては、調査終了とともに埋め戻しを行った。

9月からは2m幅だったA区のトレンチを4m幅に拡張し、再度遺構の確認作業に入った。

10月には各区とも一部の遺構に小トレンチを入れ、床面及び壁面の確認作業を進めたが、併せて10月下旬からB区→D区→A区の順にトレンチの埋め戻しも実施した。

11月18日にすべての作業を終え、現地調査を終了した。

第2節 調査要項

1. 調査目的

青森県総合運動公園拡張整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市内丸山(2)遺跡の試掘調査を行い、開発と保存の調整を図るための基礎資料を作成するものである。

2. 試掘調査期間

平成6年4月4日から11月18日まで

3. 遺跡名及び所在地

三内丸山(2)遺跡 青森市大字三内字丸山

4. 調査対象面積

78,000㎡

5. 試掘調査予定面積

10,000㎡

6. 調査委託者

青森県土木部

7. 調査受託者

青森県教育委員会

8. 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

9. 調査協力機関

青森市教育委員会・東青教育事務所

10. 調査参加者

調査指導員 村越 潔 弘前大学教育学部教授

調査協力員 花田陽悟 青森市教育委員会教育長（平成6年6月30日まで、現青森市助役）

池田 敬 青森市教育委員会教育長（平成6年7月1日より）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第四課 課長 成田滋彦

主事 上野茂樹（平成7年1月より、青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室主事）

主事 内海 剛

調査補助員 竹内隆行・神庸高・伊藤弘子・高田麻紀子

11. 調査方法

- (1) トレンチ法を基本とした分層発掘とする。
- (2) 遺構の実測と遺物の取り上げは、遺り方と平板測量で行う。
- (3) 写真撮影は、モノクローム、カラーリバーサルフィルムを使用する。

12. 出土遺物の措置

青森県埋蔵文化財調査センターで保管する。

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡(図1)

遺跡の位置

本遺跡は、市街地から南側3kmに所在し、標高約16mの丘陵に位置する。

遺跡は、小三内・三内丸山(1)・三内丸山(2)遺跡と3つに分かれていたが、最近の調査の結果から同一の遺跡であると判断され、現在は3つを統合して三内丸山遺跡と遺跡名が統一されている。

現況は、県総合運動公園の西駐車場・自由広場及び山林である。

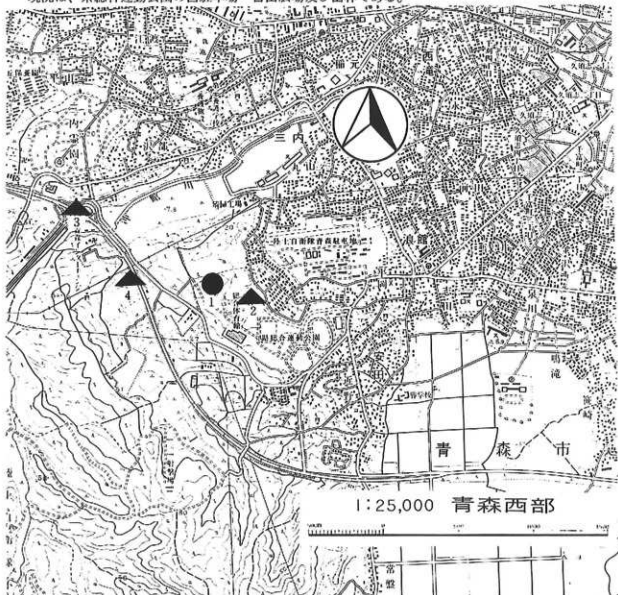


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 三内丸山遺跡 2. 近野遺跡 3. 三内沢部遺跡 4. 三内遺跡

周辺の遺跡(図1)

遺跡の分布は、沖館川を境として東側の丘陵に三内霊園遺跡(青森市教育委員会1972)・石江遺跡・江渡遺跡・三内沢部(1)遺跡(青森県教育委員会1978)・三内沢部(2)遺跡が位置し、西側の丘陵には本

遺構名	三内丸山遺跡	三内沢部(1)遺跡	三内遺跡	近野遺跡
住居跡	○	○	○	○
大型住居跡	○	×	×	○
掘柱建物跡	○	×	×	○
埋設土器	○	○	×	×
土坑墓	○	○	×	×
配石遺構	○	×	×	×
包含層(捨て場)	○	×	×	○
盛土遺構	○	×	×	×
屋外炉	○	○	×	×
ピット群	○	×	×	×
フラスコ状ピット	○	○	○	○
粘土探掘穴	○	×	×	×

表1 遺跡における遺構の在り方

遺跡を中心として、浪館(1)・(2)遺跡・近野遺跡(青森県教育委員会1979)・熊沢遺跡(青森県教育委員会1978)・安田(1)・(2)遺跡・安田水天宮遺跡が存在する。

(周辺の縄文時代中期の集落)

周辺の遺跡で、発掘調査を実施した三内沢部(1)遺跡(青森県教育委員会1978)・近野遺跡(青森県教育委員会1979)・三内遺跡(青森県教育委員会1978)の三遺跡は三内丸山遺跡の衛星集落と思われる。この三遺跡と拠点型集落の三内丸山遺跡の関連について概観したい。

(遺構)表1

三遺跡ともに共通するものは、住居跡とフラスコ状ピットを保有する点があげられる。また、埋葬施設と考えられる埋設土器・土坑墓を保有していないのは三内・近野遺跡である。このことから、三遺跡間に集落の様相に差異があることがうかがわれる。

埋葬施設に関しては、地理的な影響も考えられる。沖館川を挟んでいる地域の三内沢部(1)遺跡では独自に埋葬施設を形成し、近野・三内遺跡では三内丸山遺跡に埋葬施設を形成していたと思われる。

拠点型集落からのみ検出した盛土遺構・粘土探掘穴などは共通した遺構と考えられる。

(時期的な問題)表2

衛星集落が居住を開始するのは、円筒上層c式に至ってであり、次の円筒上層d式から本格化すると思われる。また、最花式に至って集落の継続は終了し、中期末葉の太木10式併行期の段階で、拠点型集落と衛星集落は崩壊すると考えられる。

(石器組成)

集落の石器組成を概観すると、剥片石器の不定形石器が4割を占める近野遺跡、敲磨器類が主体を占める三内沢部遺跡、石皿の比率が高い三内遺跡と、石器組成の面から見ると遺跡間において石器組成の特徴があげられる。つまり、近野遺跡では動物の解体を主に行い、又三内沢部遺跡では植物の調理を主に行っていたのではないかと考えられ、衛星集落の間に分業体制が存在していた事も石器組成の面からうかがえられると思われる。

参考文献

- 青森市教育委員会 1972 『三内臺園遺跡調査概報』青森市の文化財1
 青森県教育委員会 1978 『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
 青森県教育委員会 1978 『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
 青森県教育委員会 1978 『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
 青森県教育委員会 1979 『近野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第47集

時 期	三内丸山遺跡	三内沢部遺跡	三内遺跡	近野遺跡
円筒下層 a 式				
円筒下層 b 式				
円筒下層 c 式				
円筒下層 d 式				
円筒上層 a 式				
円筒上層 b 式				
円筒上層 c 式				
円筒上層 d 式				
円筒上層 e 式				
板 林 式				
最 花 式				
大木10式併行				

—— 住居跡 ~~~~~ 出土土器

表2 住居跡の継続時期と出土土器

第2節 遺跡の層序

基本層序

これまで以下の調査が実施されている。

- (1) 西駐車場建設に伴う発掘調査（青森県教育委員会1977）
- (2) 宅地開発に伴う試掘調査（青森市教育委員会1988）
- (3) 都市計画道路建設に伴う発掘調査（青森市教育委員会1993）

これらの調査では、おおむね3層に区分されている。今回の調査においても、同様の層序を示している。

第I層 黒色土

一面の筭敷で黄色粒子（1mmから5mm）を若干混入する。

第II層 暗茶褐色土層

第I層よりも黄色粒子を多量に含むため、若干明るく見える。

第III層 黄色土層

地山、所謂ローム層である。

参考文献

- 青森県教育委員会 1977年 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
 青森市教育委員会 1988年 『三内丸山I遺跡発掘調査報告書』
 青森市教育委員会 1993年 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』

第3節 調査の方法

- (1) 調査区の設定にあたっては、三内丸山(2)遺跡(新野球場)のグリッドを延長して設定することとし、各グリッドは4×4mを1単位とした。
- (2) 調査はトレンチ法を基本とした分層発掘とした。
- (3) 一部の遺構では、2分法・4分法によって土層観察用のベルトを設定し精査を行った。
- (4) 実測は遣り方と平板測量を用いた。縮尺は20分の1を原則としたが必要に応じて10分の1を採用した。土層の注記には、『標準土色帖』を使用した。
- (5) 遺物については、遺構外の場合はトレンチ一括とし、層位ごとに取り上げた。
- (6) 写真撮影は、モノクロームとカラーリバーサルフィルムを使用した。

第4節 遺物の分類

土器

本報告書では、青森県埋蔵文化財調査センターが作成した『青森県内の土器編年表』(青森県教育委員会1990)を参考にして分類を行った。縄文時代早期を第Ⅰ群土器、縄文時代前期を第Ⅱ群土器、縄文時代中期を第Ⅲ群土器、縄文時代後期を第Ⅳ群土器、縄文時代晩期を第Ⅴ群土器、弥生時代を第Ⅵ群土器、平安時代を第Ⅶ群土器と大別し、これを時期・器形・文様などから更に細別した。

第Ⅰ群土器(縄文時代早期)

- 1類土器 白浜式に相当するもの。
- 2類土器 赤御堂式に相当するもの。

第Ⅱ群土器(縄文時代前期)

- 1類土器 早稲田6類に相当するもの。
- 2類土器 円筒下層a・b式に相当するもの。
- 3類土器 円筒下層d式に相当するもの。

第Ⅲ群土器(縄文時代中期)

- 1類土器 円筒上層a式に相当するもの。
- 2類土器 円筒上層b式に相当するもの。
- 3類土器 円筒上層c式に相当するもの。
- 4類土器 円筒上層d式に相当するもの。
- 5類土器 円筒上層e式に相当するもの。
- 6類土器 榎林式に相当するもの。
- 7類土器 最花式に相当するもの。
- 8類土器 大木10式併行期に相当するもの。
- 9類土器 縄文時代中期に相当する器台及び粗製土器を本類とした。

第Ⅳ群土器（縄文時代後期）

- 1 類土器 十腰内Ⅰ式に相当するもの。
- 2 類土器 十腰内Ⅰ式以降に相当するもの。

第Ⅴ群土器（縄文時代晩期）

細別せず、一括して取り扱った。

第Ⅵ群土器（弥生時代）

- 1 類土器 田舎館式に相当するもの。

第Ⅶ群土器（平安時代）

細別せず、一括して取り扱った。

石器

この度の発掘で出土した石器については、以下に示すように大きく器種ごとに分類し、更に形態や特徴ごとに細分したものを観察表に記載した。

①石鏃

Ⅰ類 無茎鏃

- a 凹基のもの
- b 平基のもの

Ⅱ類 有茎鏃

- a 凹基のもの
- b 平基のもの
- c 凸基のもの

Ⅲ類 尖基鏃

②石槍

③石匙

- Ⅰ類 縦型のもの
- Ⅱ類 横型のもの

④石筥

- Ⅰ類 両面加工のもの
- Ⅱ類 片面加工のもの

⑤不定形石器

- I類 小剥片の周縁を細部調整しているもの
- II類 剥片の一部の側縁を細部調整しているもの
- III類 先端を尖頭状に調整しているもの
- IV類 その他

⑥磨製石斧

⑦半円状扁平打製石器

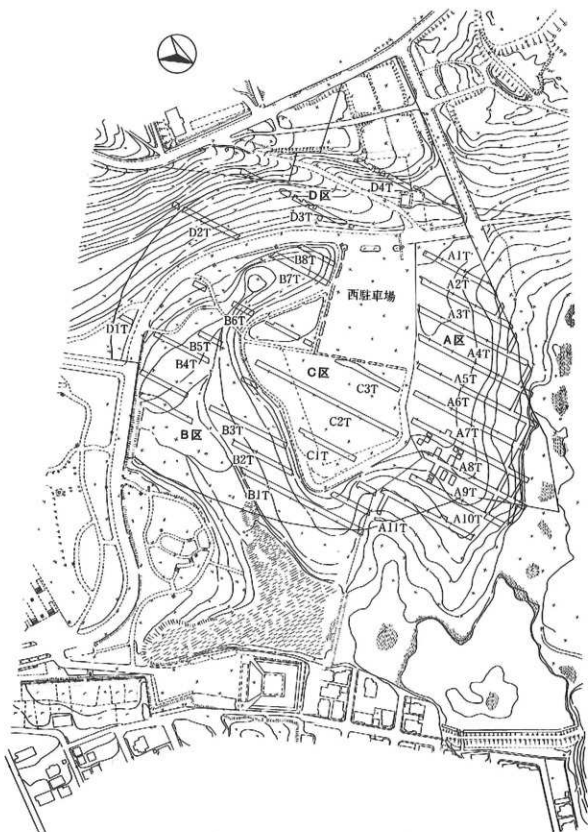
- I類 半円状を呈する面が自然面で、その他の面を打ち欠いているもの
- II類 周辺を打ち欠いているもの
- III類 全面を打ち欠いているもの

⑧敲磨器類

- I類 主として凹のあるもの
- II類 主として敲打痕のあるもの
- III類 主として磨り痕のあるもの（北海道式石冠を含む）
- IV類 敲打痕と磨り痕が複合しているもの

⑨石皿・台石類

⑩石錘



139%

图2 調査区全体図

第3章 調査の概要

今回の試掘調査で確認された遺構は、縄文時代及び平安時代の竪穴住居跡とみられる遺構が109軒、土坑・柱穴とみられる遺構1,151基、埋設土器遺構4基、配石遺構2基、盛土遺構1基、溝跡1基などである。また少量の遺物を含んだ泥炭層を3地点で確認している。

遺構・遺物については、A～D区の四区に分けて記載する。

第1節 A区の検出遺構と出土遺物(図2)

(1) 検出遺構(図4)

A区全体で4,300㎡の面積を調査したところ、縄文時代中期と平安時代の住居跡79軒、土坑・柱穴490基、埋設土器遺構2基、溝跡1基をそれぞれ確認した。又、4～8トレンチの都市計画道路に面した地点(泥炭層1)と10・11トレンチの南端(泥炭層2)の2地点から泥炭層を確認した。泥炭層1は縄文時代中期(門筒上層式)で厚さ2～3m、クルミが出土している。泥炭層2は縄文時代前期(円筒下層式)で、厚さ30cmとなっている。

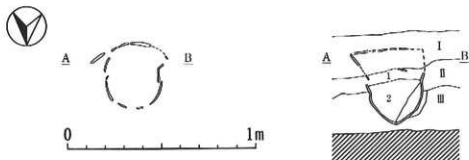
各トレンチごとの遺構確認数は以下の通りである。

No	住居跡	土坑・柱穴	その他	No	住居跡	土坑・柱穴	その他
1	3軒	44基		7	9軒	48基	溝跡 1基
2	8軒	24基	埋設土器 1基	8	10軒	65基	
3	4軒	38基		9	11軒	66基	
4	4軒	42基		10	5軒	54基	
5	16軒	54基	埋設土器 1基	11	0軒	0基	
6	9軒	55基					

表3 A区遺構表

2トレンチ埋設土器遺構(図3・5)

IV R-145グリッドの第II層から埋設土器が1基検出された。土器は正位の状態で見出されたが、欠損が激しく、口縁も一部がずれたような状態であった。覆土は2層に分層された。



A区2トレンチ埋設土器土器注記

第I層 黒褐色土 30YR2/2 粘土質、しまり強。
 第II層 明黄褐色土 30YR7/6 粘土質、しまり強。
 第III層 黒褐色土 30YR7/6 粘土質、しまり強。パリス粒付凝集、シルト質。
 第IV層 黒褐色土 30YR2/3 粘土質、しまり強。パリス粒凝集。

図3 A区2トレンチ出土土器(1)

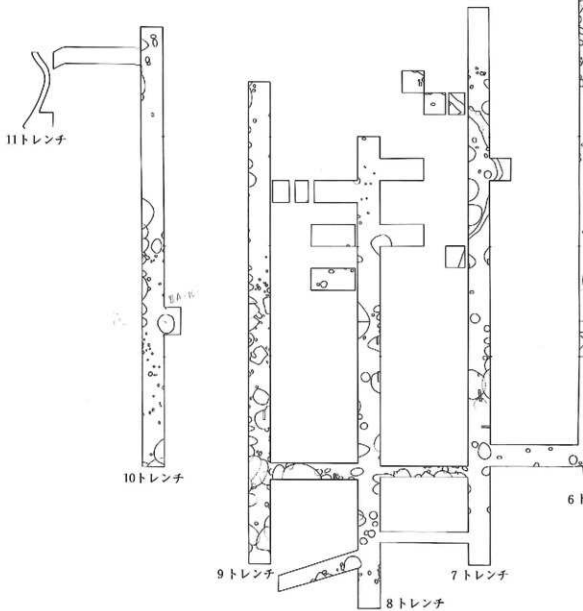
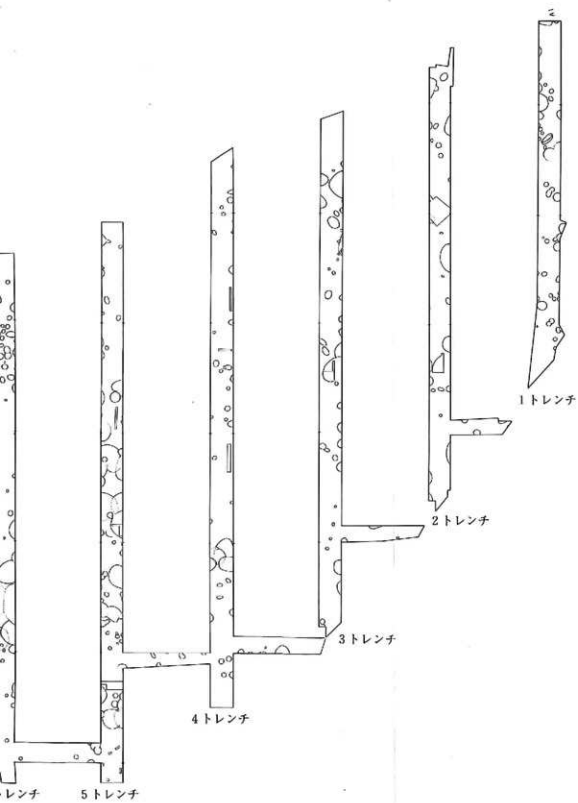


図4 A区



0 20m

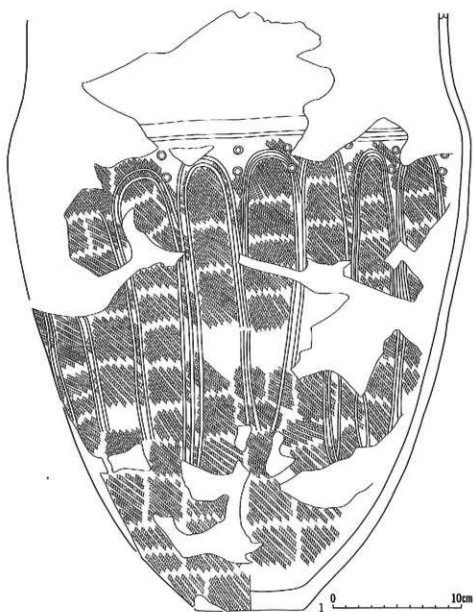


図5 A区2トレンチ出土土器(2)

埋設土器

形状は、口縁部は欠損しているが、口頸部が内反する深鉢形である。

二条の横位沈線を巡らして区画帯を構成している。口縁部文様帯は無文である。

胴部文様帯は、地文縄文地に縦の長楕円形文と対の連続刺突を施している。

8トレンチ第1号住居(図6)

〈位置〉ⅢJ・ⅢK-144・145グリッドに位置する。

〈確認〉褐色土の落ち込みとして確認した。

〈重複〉なし。

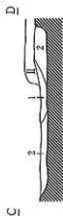
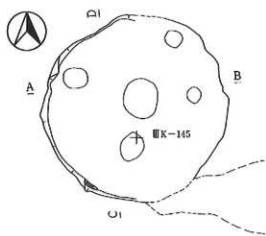
〈規模〉東西2.92m×南北2.86m、深さ20cm。

〈平面形〉円形を呈する。

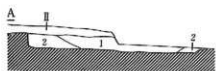
〈覆土〉2層に区分された。浅いため明確ではないが、自然堆積と思われる。

〈壁〉壁は西側の部分でしか認められない。確認された壁も深さ20cm程度である。

〈床〉全体にはほぼ平坦である。

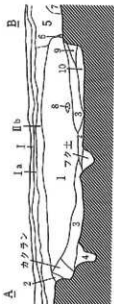
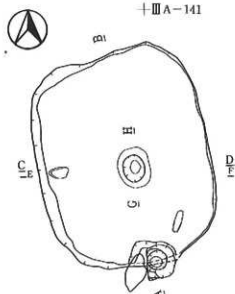


A区トロンク第1号住居土層断面記
 1 1層 粘質土 101820/2 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 2 2層 黄褐色土 101822/2 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 3 3層 赤褐色土 101823/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 4 4層 赤褐色土 101824/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量



第1号住居跡

0 2m



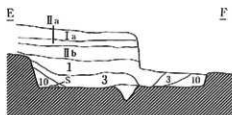
0 1m

A区トロンク第3号住居土層断面記

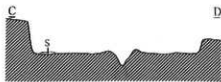
1 1層 粘質土 101820/2 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 2 2層 黄褐色土 101822/2 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 3 3層 赤褐色土 101823/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 4 4層 赤褐色土 101824/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量

A区トロンク第3号住居土層断面記

1 1層 粘質土 101820/2 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 2 2層 黄褐色土 101822/2 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 3 3層 赤褐色土 101823/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 4 4層 赤褐色土 101824/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 5 5層 粘質土 101825/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 6 6層 粘質土 101826/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 7 7層 粘質土 101827/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 8 8層 粘質土 101828/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 9 9層 粘質土 101829/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 10 10層 粘質土 101830/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 11 11層 粘質土 101831/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量
 12 12層 粘質土 101832/1 1.5m厚、磁器片、漆片、ローム少量



0 2m



第3号住居跡

図6 A区住居跡

- 〈 炉 〉 床面のほぼ中央に炉と思われる落ち込みを確認した。
- 〈 柱 穴 〉 柱穴と思われる落ち込みを4基確認した。
- 〈 施設 〉 なし。
- 〈 遺物 〉 覆土から石筥1点、不定形石器1点、敲磨器類1点が出土した。土器片は覆土の全面に散在していた。
- 〈 小 結 〉 本住居跡は、出土遺物から縄文時代中期後半の構築と思われる。

10トレンチ第3号住居（図6）

- 〈 位 置 〉 II T・III A-141グリッドに位置する。
- 〈 確 認 〉 黒色土の落ち込みとして確認した。
- 〈 重 複 〉 なし。
- 〈 規 模 〉 東西2.72m×南北3.42m、深さ70cm。
- 〈 平面形 〉 南北に長い楕円形である。
- 〈 覆 土 〉 3層に区分された。自然堆積と思われる。一部には焼土もみられた。
- 〈 壁 〉 壁の深さは60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。南側の壁の一部は木根による擾乱及び掘立柱建物の柱穴と思われるビットによって明確に確認できなかった。
- 〈 床 〉 おおよそ平坦で、貼床が確認された。
- 〈 炉 〉 床面の中央部にビットを確認した。覆土中に焼土を含んだ層がみられることから、土器埋設が跡と思われる。
- 〈 柱 穴 〉 柱穴と思われるビットは確認できなかった。
- 〈 施設 〉 なし。
- 〈 遺物 〉 覆土中から多量のチップが検出された。石器も石匙1点、磨製石斧1点、敲磨器類4点の他、床面に埋め込まれる形で石皿・台石の類も2点出土していることから、石器製作のための住居であることが考えられる。土器片も覆土中全体に散在しており、土器埋設炉に使用されていたのではないかと考えられるものもある。
- 〈 小 結 〉 本住居跡は、出土遺物から縄文時代中期後半の構築と思われる。

住居跡土器（図7～9）

第Ⅱ群 3類土器（円筒下層 d式）図9-20

胴部破片である。木目状燃糸文を縦方向に施文している。

第Ⅲ群 1類土器（円筒上層 a式）図9-11

口縁部破片であり、口唇部寄りに一条の横位の粘土紐を貼り付け、粘土紐の上面に燃糸圧痕を施文している。

第Ⅲ群 5類土器（円筒上層 e式）図7-1、8-7・8、9-12・14・25

形状のわかる(1)は、口頸部が内反し四波状を呈する深鉢形であり、波状口縁の突起部に粘土紐を用いて眼・鼻を簡略表現した人面付土器である。

口唇部には燃糸圧痕と中間部に粘土紐を貼り付けている。突起部の垂下部には胸骨文（沈線）のモチーフで文様構成をおこなっている。

第Ⅲ群 6類土器（椀林式）図9-16

地文縄文地に渦巻文・弧状文を施文している。

第Ⅲ群 7類土器（最花式）図9-26

胴部破片であり、地文縄文地に二条を一単位として長楕円形文を施文している。

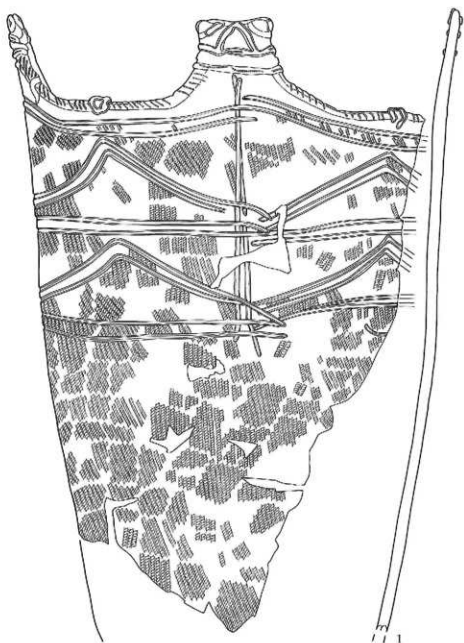
第Ⅲ群 9類土器（縄文時代中期の粗製土器）図8-2～6、9-10・17・19・21・23・24・27

2は口頸部が内反する波状口縁で、口唇部寄りに燃糸圧痕を施文している。10は頂端部に燃糸圧痕・5は縦位の粘土紐を貼り付け口唇部寄りに燃糸圧痕を施文・24は口唇部寄りに円形の盲孔がみられる。

本類の時期は、図8-2・3・5が、円筒上層 d・e式に相当すると思われる。図8-4は円筒上層式以降と思われる。

第Ⅴ群土器（縄文時代晩期）図8-9

胴部破片であり、弧状の沈線を施文している。器表面に赤色顔料を塗布している。



3 H 瓦土

0 1 10cm

图7 A区住居跡土器(1)

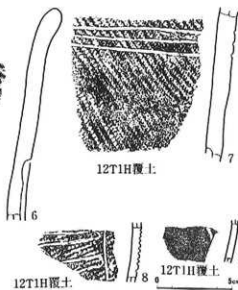
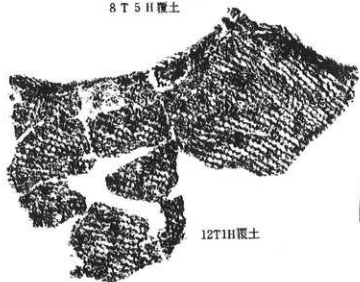
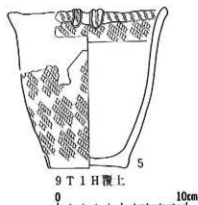
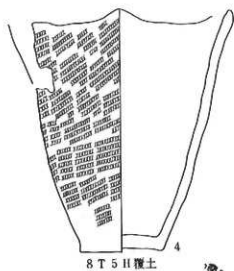
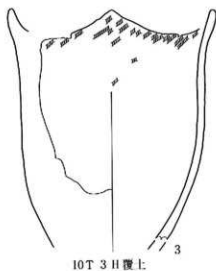
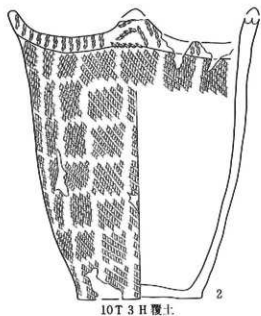


图 8 A区住居跡土器(2)

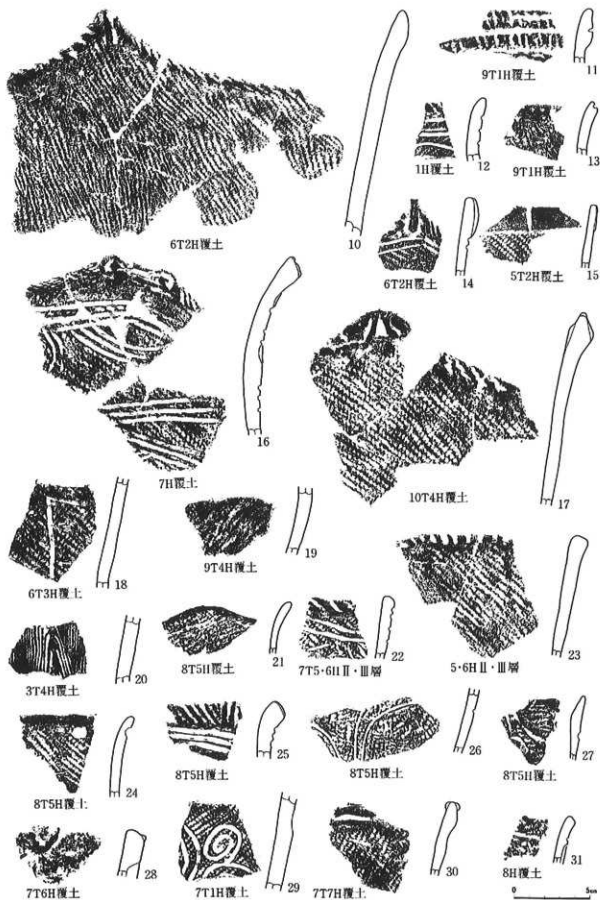


图9 A区住居跡土器(3)

(2) 土器 (遺構外) (図10-74)

第Ⅰ群 2 類土器 (赤御堂式) 図11-37

平口縁で口唇部の上面に縄文を施文し、器表面には回転方向を変えた結束のみられない羽状縄文を施文し、器内面に条痕がみられる。

第Ⅱ群 2 類土器 (円筒下層 a・b 式) 図11-39・40

口頸部に一〜二条の粘土紐を巡らして区画帯を構成している。口縁部文様帯には綾絡文を横位に施文し、胴部文様帯には縄文を施文している。

区画に用いた粘土紐の上面には、摺糸圧痕・指頭圧痕を連続に施文している。

第Ⅱ群 3 類土器 (円筒下層 d 式) 図11-41・42

口縁部文様帯は狭義の文様帯で斜位の摺糸圧痕で文様を構成し、胴部文様帯には縄文を施文。

第Ⅲ群 1 類土器 (円筒上層 a 式) 図11-43・44

波状の口縁部破片である。隆部の上面に縄文を施文し隆部間に摺糸圧痕を施文している。44は波状口縁の垂下部に貫通孔のみられるものである。

第Ⅲ群 2 類土器 (円筒上層 b 式) 図11-45-47

口縁部破片であり、平口縁と波状口縁を有する。文様は粘土紐 (上面に縄文及び摺糸圧痕を施文) の間に馬蹄形圧痕 (摺糸) を連続に施文している。

第Ⅲ群 3 類土器 (円筒上層 c 式) 図11-48・49

口頸部破片であり、粘土紐の上面に縄文を施文し、粘土紐間に爪形文を連続に施文している。

第Ⅲ群 4 類土器 (円筒上層 d 式) 図11-50-55

口縁部破片である。粘土紐 (素文) を横位・斜位に貼り付けて文様構成をおこなっている。

第Ⅲ群 5 類土器 (円筒上層 e 式) 図10-33・34・図12-56-70

波状口縁と平口縁を呈する。波状口縁の垂下部には横位及び弧状の粘土紐を貼り付けている。口唇部寄りには摺糸圧痕及び短沈線を巡らしている。

文様は、波状口縁の垂下部を中心として胸骨文及び横位沈線を施文している。

第Ⅲ群 6 類土器 (榎林式) 図12-71-76

形状は、75が浅鉢形・76は橋状把手を有する壺形、他は深鉢形の器形である。

口唇部寄りが厚みを有し、沈線を施文している。口縁部文様帯は、横位・斜位・渦巻文を施文。

第Ⅲ群 7 類土器 (最化式) 図10-32、図13-77-86

本類の形状は、口頸部が内反し胴部上半が張る広口壺形と、口頸部が内反する深鉢形である。

区画帯は、一〜二条の刺突列を巡らして区画帯を構成している。口縁部文様帯は、無文が多いが、81は縦位に刺突列を施文しているものである。

胴部文様帯は、二〜三条を一単位とした楕円形文と刺突列を組み合わせた文様構成である。

第Ⅲ群 8 類土器 (大木10式併行) 図13-87・88

88は波状口縁を有し、弧状の磨消縄文で文様構成をおこなっている。

第Ⅲ群 9 類土器 (縄文時代中期の粗製土器と器台) 図13-89-98・図14-99

本類は一括して粗製土器を取り扱った。

90・91は、口唇部寄りに一条の横位沈線を施文している土器で、円筒上層 e 式、榎林式に相当する

と思われる。

93・94は、折り返し口縁の土器であり、折り返し口縁部が無文のものと縄文を施文しているものがみられ、最花式に相当すると思われる。

97・98は、平口縁で縄文のみ施文する土器である。大木10式併行期の土器と思われる。

99は、器台の一部破片である。無文で中央部に貫通孔がみられる。

第Ⅳ群第1類土器（十腰内Ⅰ式）図14-100-110

形状は、壺形・鉢形と深鉢形と思われる。

文様は、100が粘上紐・110が横位と格子目文・105は稚拙な入組文を施文している。

第Ⅳ群第2類土器（十腰内Ⅰ式以降）図14-111

平口縁で口唇部が内湾する形状である。弧状文の文様構成である。

第Ⅴ群土器（縄文時代晩期）図14-113-120

形状は、113が注口形であり、他は鉢及び深鉢形と思われる。

118-120は精製土器で、横位・弧状文を施文している。115は粗製土器で、二股状突起を有する。縄文及び横位沈線を施文し、スス状炭化物の付着が多い。

(3) 石器 (図15-23)

A区からは60点の石器が出土しているが、内訳は石鏃9点、石槍2点、石匙2点、石鏡4点、不定形石器9点、磨製石斧5点、半月状扁平打製石器3点、敲磨器類21点、台石・石皿類5点となっている。A区は調査面積が全体の50%以上を占め、一部精査を実施した遺構もあることから4区の中では最も石器の出土量が多かった。器種では、半月状扁平打製石器や敲磨器類の出土率が高い反面、石匙は7点のうち2点しか出土しなかった。詳細は以下観察表に記載する。

表4 A区住居跡出土石器観察表

図版番号	トレンチ	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	器種	小分類	備考	整理%
図15-1	8	フ	5.2	4.0	1.6	26.1	珪質	不定形	Ⅱ	1H	34
図15-2		フ	5.1	2.6	1.4	12.8	珪質	不定形	Ⅱ	1H	33
図15-3		床直	8.5	8.8	3.4	221.4	安山器	敲磨器類	Ⅲ	1H	35
図15-4	10	フ	4.0	1.3	0.7	2.8	珪質	石鏃	Ⅱb	3H S-7	41
図15-5		フ	2.3	1.5	0.5	1.2	珪質	*	Ia	3H	42
図15-6		フ	3.5	1.5	0.8	3.8	珪質	*	Ⅲ	3H	43
図15-7		フ	3.7	3.5	0.8	5.4	珪質	石匙	Ⅱ	3H つまみ部欠損	47
図15-8		フ	9.1	4.2	2.5	67.3	珪質	石鏡	I	3H	114
図15-9		フ	2.9	4.3	1.4	13.2	緑細凝	磨製石斧		3H 大平穴痕(刃部一部)	49
図16-1		フ	13.3	10.0	5.5	890.2	凝灰	敲磨器類	Ⅳ	3H	51
図16-2		フ	9.9	4.8	5.6	309.9	安山	*	Ⅳ	3H	109
図16-3		フ	11.3	7.0	4.1	323.5	安山	*	Ⅲ	3H	52
図16-4		フ	12.3	9.6	5.3	631.6	凝灰	石皿		3H	108



图10 A区遺構外出土土器(1)

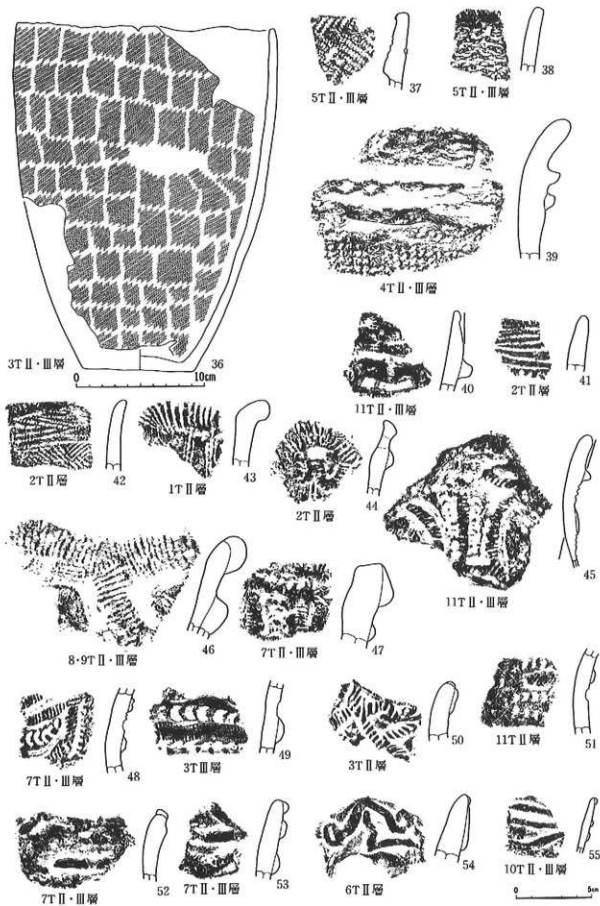


图11 A区遺構外出土土器(2)



图12 A区遗構外出土土器(3)

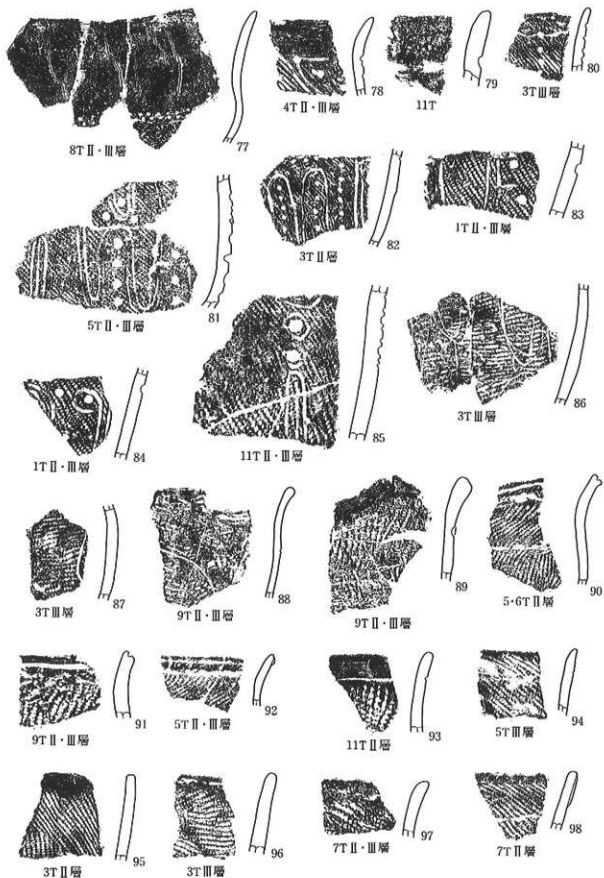


图13 A区遺構外出土土器(4)

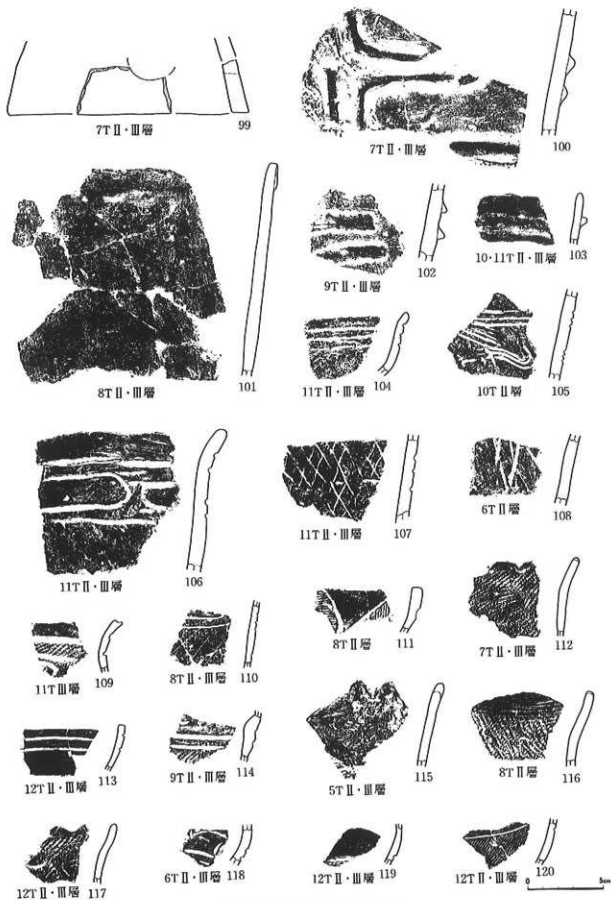


图14 A区遗構外出土土器(5)

表5 A区遺構外石器観表

図版番号	トレンチ	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	器種	小分類	備考	整理No
図17-1	1	II	3.1	1.3	0.6	2.1	珪質	石鏃	II b		1
図17-2	2	II III	3.1	0.9	1.4	1.0	珪質	*	I b	刃部欠損	5
図17-3		II	4.1	1.3	0.6	3.3	珪質	*	II b	先端部欠損	6
図17-4		カクニン	2.6	1.0	0.4	1.1	珪質	*	II b	4H 先端部・基部欠損	7
図17-5	6	II	3.1	1.5	0.9	2.9	珪質	*	II b		22
図17-6	10	II III	1.2	1.3	0.4	0.7	珪質	*	?	中間部のみ現存	40
図17-7		II III	15.8	3.8	3.2	138.4	珪質	石槍			44
図17-8	11	カクニン	6.8	2.6	1.1	15.0	珪質	*		1 H	53
図17-9	6	カクニン	4.6	3.7	1.5	21.5	珪質	石鏃	I	2H 上部・下部欠損	23
図17-10	5	II III	5.6	3.9	1.4	24.6	珪質	石槍	II		15
図17-11	9	II	9.3	3.9	1.8	55.1	珪質	*	I	打製石斧?	36
図17-12	10	II III	9.1	3.3	2.0	54.1	珪質	*	I		45
図18-1	5	カクニン	7.1	3.6	1.0	15.7	珪質	不定形	II	2 H	16
図18-2		II III	3.7	3.6	0.9	11.2	珪質	*	II		17
図18-3	7	カクニン	2.7	3.9	1.4	12.3	珪質	*	IV	6 H	27
図18-4		カクニン	8.0	7.3	2.9	144.8	珪質	*	II	6 H	28
図18-5	9	II III	7.2	5.8	2.5	117.5	珪質	不定形	II		37
図18-6		カクニン	2.9	1.5	0.9	2.0	珪質	*	IV	1 H	38
図18-7	10	II	4.5	2.1	0.7	5.3	珪質	*	III		46
図18-8	1	II	5.0	4.1	2.4	63.2	鉾紋	磨製石斧		上部欠損(刃部のみ)	2
図18-9	6	II	9.8	4.2	2.5	170.3	緑細凝	*		上部欠損	24
図18-10	7	II III	5.1	4.0	1.5	45.6	質	*		刃部欠損	29
図18-11	10	II III	9.4	3.5	1.8	77.5	緑細凝	*		刃部欠損	48
図19-1	3	II III	8.0	6.7	3.5	305.7	凝灰	特別扁平	I		12
図19-2		カクニン	10.5	6.5	4.3	333.5	安山	*	II	1 P	105
図19-3	6	II III	7.2	6.9	3.3	213.8	凝灰	*	I		26
図19-4	1	II	7.3	6.8	4.3	295.5	安山	最厚部	III		3
図19-5		II III	10.6	8.2	4.2	301.8	安山溶岩	*	I	凹石	4
図19-6	2	III	6.2	4.8	1.5	63.3	凝灰	*	I		8
図19-7	3	III	10.9	5.8	5.8	384.3	流紋	*	II		10
図20-1		II III	24.7	8.3	6.4	2023.5	凝灰	*	III		11
図20-2		II III	8.2	7.2	5.3	420.3	安山	*	III	北海道式石冠	13
図20-3	4	II III	8.7	8.2	6.0	430.2	安山	*	IV		106
図20-4	5	II III	14.4	7.3	6.7	1064.6	安山	*	II		18
図20-5	5	II III	14.2	9.6	4.0	807.9	凝灰	最厚部	III		19
図21-1		II III	10.6	7.2	3.3	275.0	凝灰	*	I	凹石	20
図21-2	6	II III	5.6	4.6	2.7	88.7	流紋	*	II		25
図21-3	7	II III	13.4	7.2	6.8	835.5	安山	*	III		30
図21-4		カクニン	8.9	6.2	1.5	46.0	凝灰	*	III	6 H	31
図21-5		II III	8.8	4.4	4.3	238.4	安山	*	II		32
図21-6		II III	6.3	6.0	1.5	80.3	凝灰	*	III		107
図21-7	9	II III	10.9	9.0	5.7	809.3	安山	*	IV		39
図22-1	10	II III	8.0	6.2	3.5	228.9	安山	*	IV		50
図22-2	5	カクニン	16.8	9.5	5.3	1070.3	ハンレイ	台石		14 H	21
図22-3	2	II III	14.7	7.5	10.0	724.6	安山	石皿			9
図22-4	3	III	10.4	8.1	3.9	340.7	凝灰	*			14
図23-1	3	II III	36.6	23.0	11.0	11.6kg		*			112

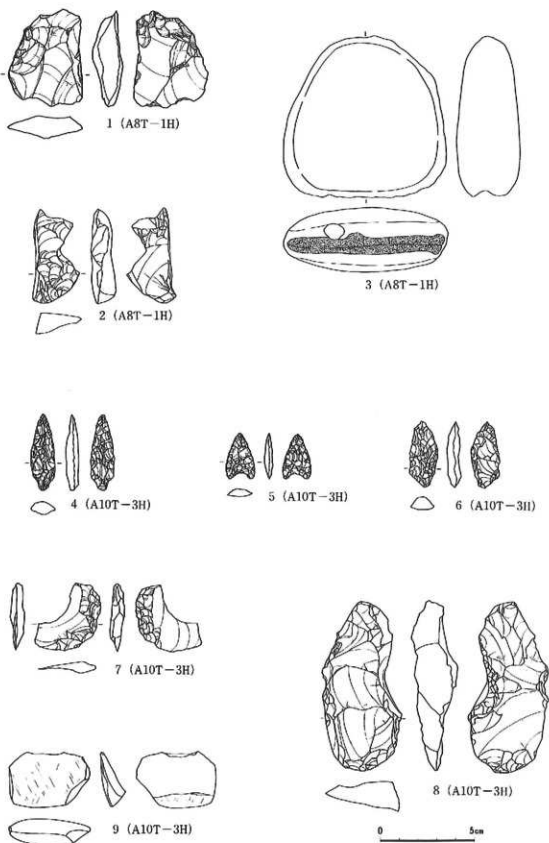


图15 A区住居跡石器(1)

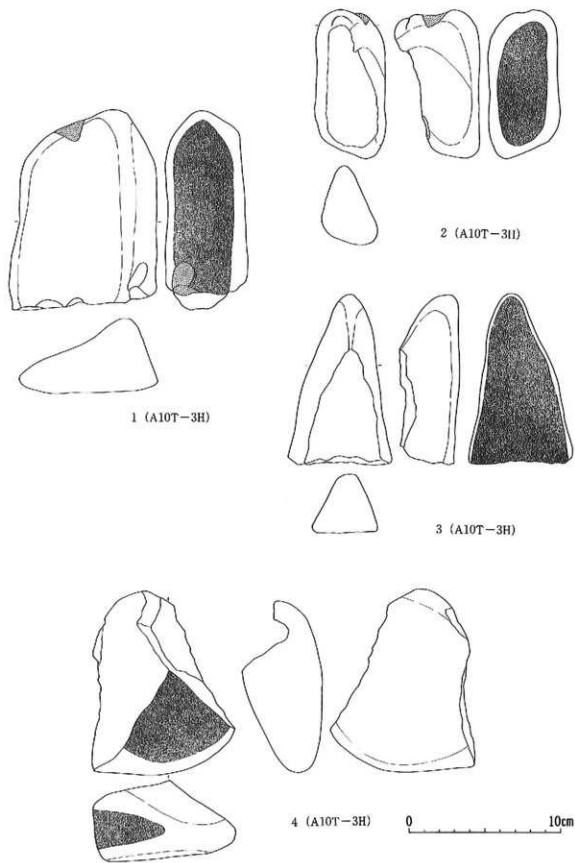


图16 A区住居跡石器(2)

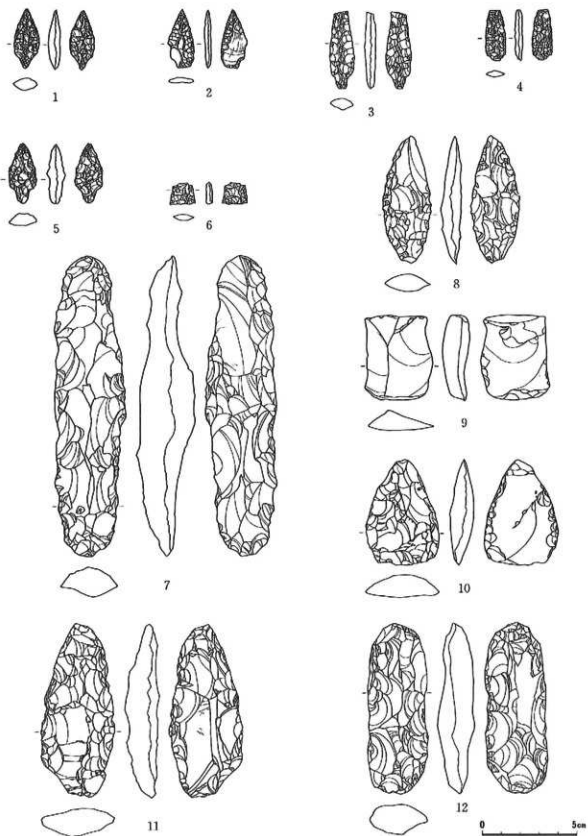


图17 A区遗物出土石器(1)

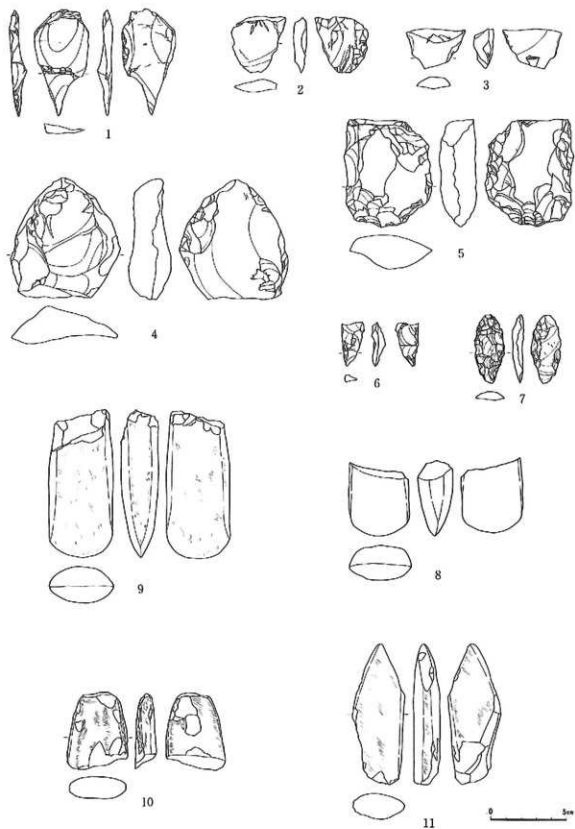


图18 A区遗址外出土石器(2)

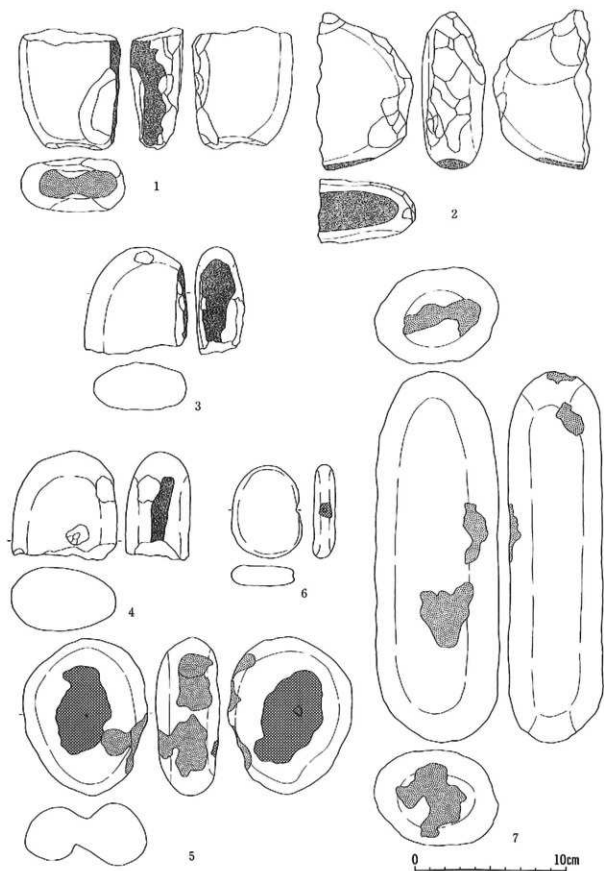


图19 A区遗址外出土石器(3)

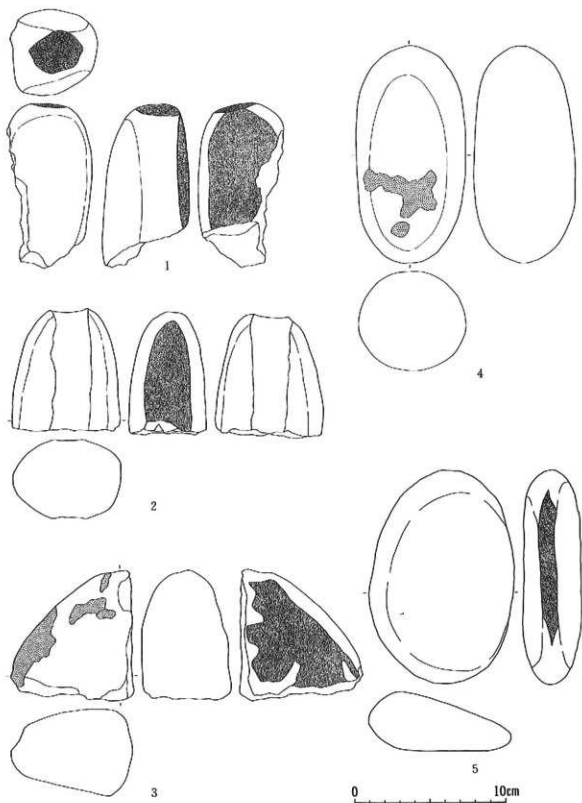


图20 A区遗物外出土石器(4)

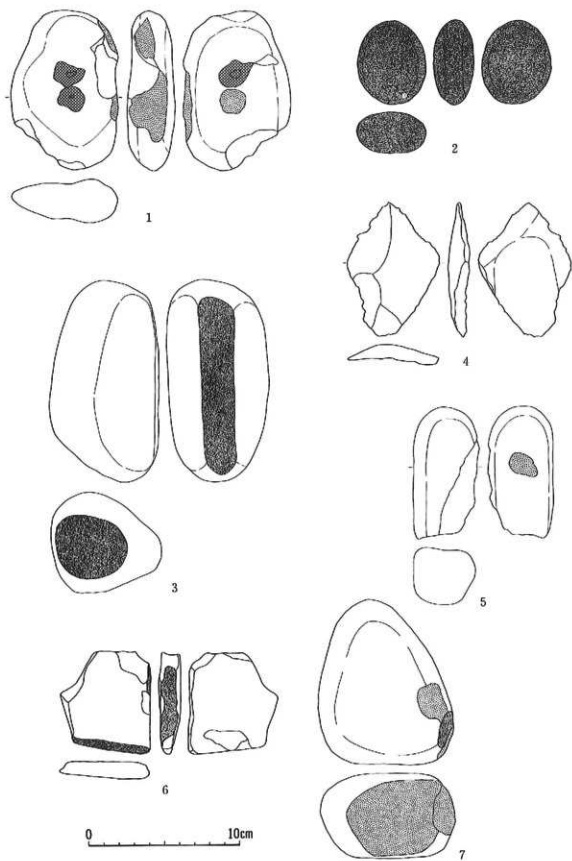


图21 A区遺構外出土石器(5)

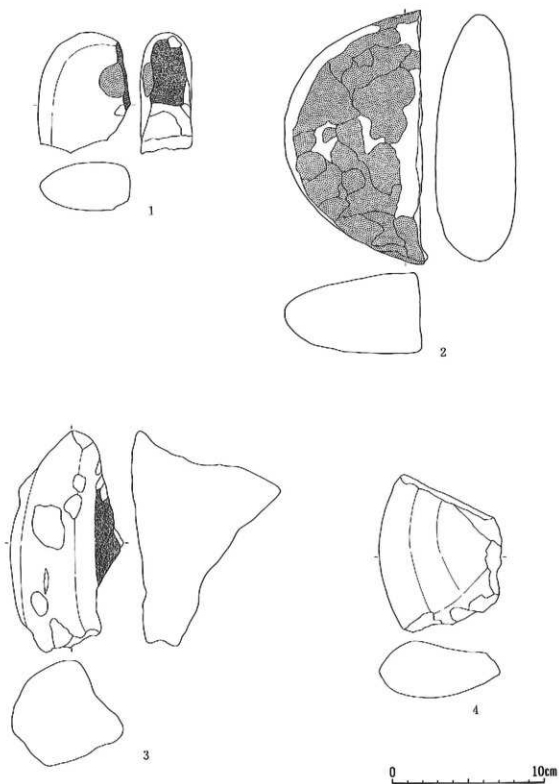


图22 A区遗構外出土石器(6)

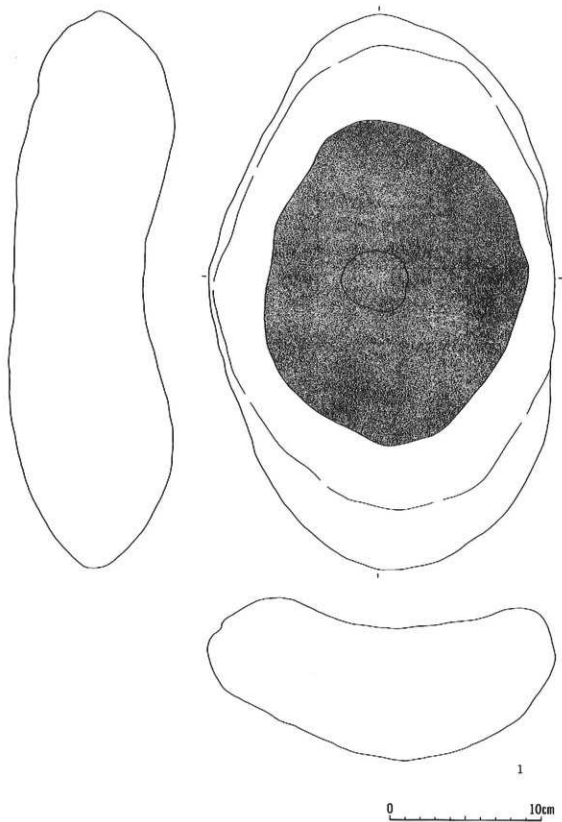


图23 A区遺構外出土石器(7)

第2節 B区の検出遺構と出土遺物（図24）

(1) 検出遺構（図24）

B区全体で2,200㎡の面積を調査したところ、縄文時代中期・後期の住居跡21軒（うち3トレンチ（南）に大型住居1軒）、土坑・柱穴340基、埋設土器遺構2基をそれぞれ確認した。住居跡は東側に多く分布し、重複（同一地点に住居跡が時期差で重なっている）がみられる。又、7・8トレンチの中央部に泥炭層（泥炭層3）を確認した。泥炭層3は縄文時代後期（十腰内I式）で、厚さ2m以上である。

各トレンチごとの遺構確認数は以下の通りである。

No	住居跡	土坑・柱穴	その他	No	住居跡	土坑・柱穴	その他
1	5軒	86基	埋設土器 1基	中	7軒	39基	
2	4軒	72基		南	5軒	23基	埋設土器 1基
北	0軒	11基		4	0軒	47基	
中	4軒	50基		5	0軒	0基	
南	0軒	11基		6	0軒	6基	
3	12軒	68基	埋設土器 1基	7	0軒	32基	
北	0軒	8基		8	0軒	27基	

表6 B区検出遺構表

(2) 土器 図25～27

第I群 1類土器（白浜式？）図25-2

胴部破片であり、貝殻条痕が、器表面には横位方向に器裏面に横・斜位に施文している。

第II群 1類土器（早稲田6類）図25-3～5

4は底辺部寄りの土器で竹管状工具で連続に刺突している。5は横位方向にループ文を施文。

第II群 2類土器（円筒下層a式）図25-6～9

平口縁を呈する土器である。6は口唇寄りと口頸部に燃糸で二条を一単位とした区画を構成し、胴部に縄文を施文している。7は絡条体を横位に施文している。

第II群 3類土器（円筒下層d式）図25-10～13

口縁部文様帯は、横位・斜位に燃糸圧痕を施文し、胴部文様帯は縄文及び木目状燃糸文を施文。

第III群 1類土器（円筒上層a式）図25-14・15

口頸部が内湾し波状口縁を呈する深鉢形である。

文様は、粘土紐を用いて縦位・斜位に貼り付け、その間には燃糸圧痕を施文している。粘土紐の上面に縄文を施文している。

第III群 2類土器（円筒上層b式）図25-16・17

文様は、17が燃糸圧痕と馬蹄形圧痕（燃糸）を組み合わせて施文し、16が斜位・弧状に粘土紐を貼り付け、その間に馬蹄形圧痕を施文している。粘土紐の上面には縄文を施文している。

第III群 3類土器（円筒上層c式）図25-18・19

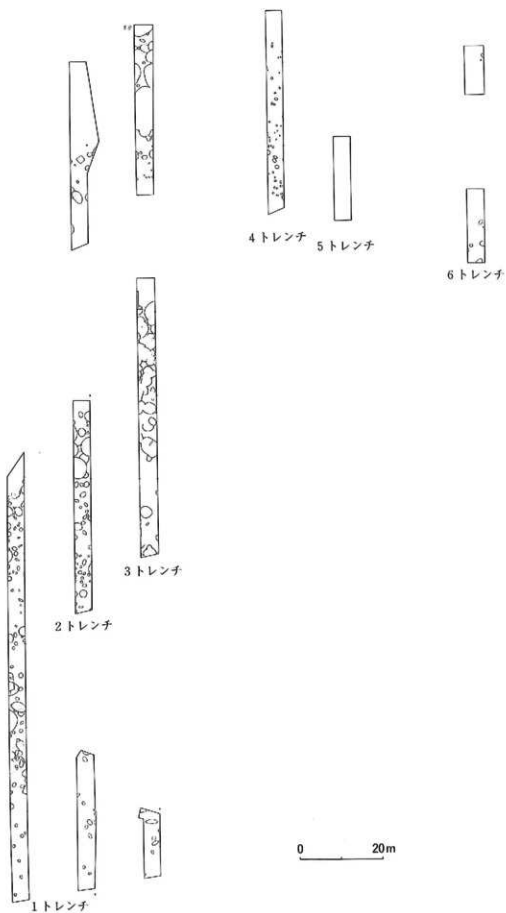


図24 B区調査区遺構



7トレンチ



8トレンチ



形状は、波状口縁の深鉢形である。

文様は、縦位・斜位の粘土紐を貼り付け、粘土紐間に竹管状工具で連続に刺突を施文している。

第Ⅲ群 4 類土器（円筒上層 d 式）図25-20・21 図26-22

形状は、波状口縁で深鉢形が主体である。22は橋状把手を有している。

文様は、地文縄文地に斜位・縦位の粘土紐（素文）を貼り付けている。22は胸骨文のモチーフで貫通孔を有する。

第Ⅲ群 5 類土器（円筒上層 e 式）図26-23-25

形状は、平口縁と波状口縁を呈する深鉢形である。

文様は、口唇部寄りに燃糸圧痕・山形状の粘土紐を貼り付けている。24は胸骨文・25は横位の文様構成である。

第Ⅲ群 6 類土器（榎林式）図26-26-31

平口縁及び波状口縁を呈する深鉢形と、橋状把手を有する壺形である。

文様は、波状口縁の頂端部に渦巻文・円形刺突を施文し口唇部の下位には縄文を施文している。

第Ⅲ群 7 類土器（最花式）図25-1、図26-32-41

形状は平口縁の深鉢形が主体であるが、33は広口壺形を呈する。区画帯には、横位沈線・連続刺突を巡らして区画帯を構成している。

口縁部文様帯は、狭義の文様帯であり無文・縄文・連続刺突を施文している。

胴部文様帯は、地文縄文地に楕円形と刺突を組み合わせた文様構成である。39は長方形の文様である。

第Ⅲ群 8 類土器（大木10式併行）図27-43

胴部破片であり、地文縄文地に弧状文の文様構成である。

第Ⅲ群 9 類土器（縄文時代中期の粗製土器）図27-44-53

44・46・48は、口唇部に燃糸圧痕及び連続刺突を施文しているもので、円筒上層 d・e 式に併行すると思われる。

45・51・53は、折り返し口縁で縄文を施文し、最花式に相当すると思われる。

52は、平口縁で縄文のみの施文である。大木10式併行期に相当すると思われる。

第Ⅳ群 1 類土器（十腰内 I 式）図27-54-62

文様は、二～三条を一単位として斜位と弧状を組み合わせた文様構成である。56は格子目状の文様・58は横位の文様で半肉彫技法である。

54・55は、地文縄文施文後に横位に燃糸圧痕を施文した土器で、十腰内 I 式以前の土器である。

第Ⅴ群土器（田舎館式）図27-63-65

口頸部と底辺部の破片である。文様は、帯縄文（磨消）間に山形状の文様を横位方向に施文している。

第Ⅵ群土器（平安時代）図27-66

須恵器の甕の口頸部であり、器表面にはタタキ目文がみられる。

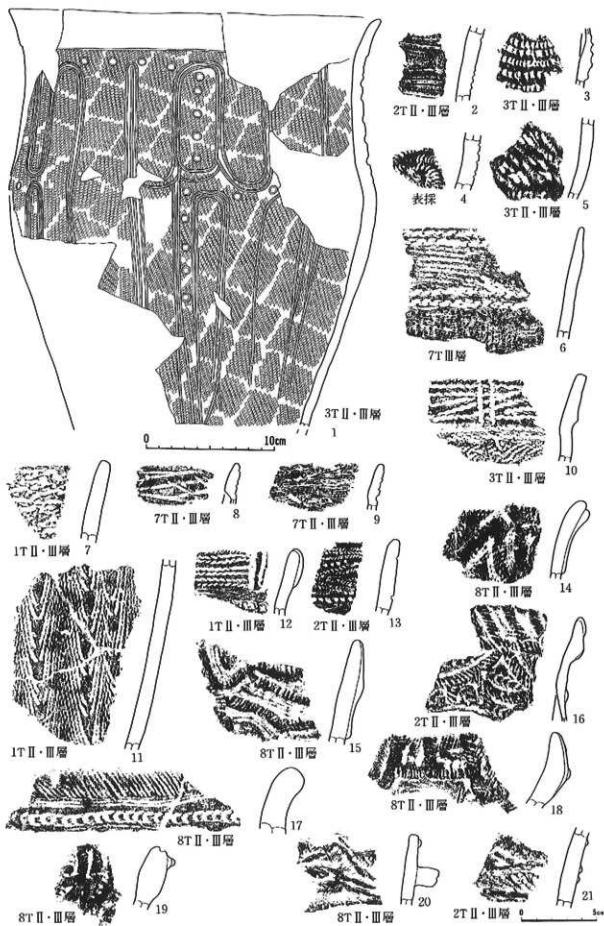


图25 B区遺構外出土土器(1)

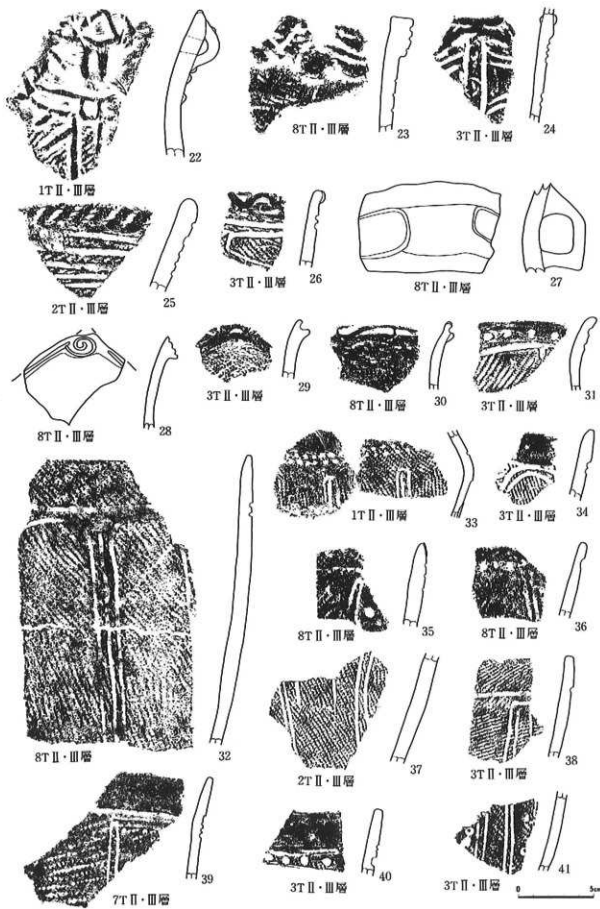


图26 B区遺構外出土土器(2)

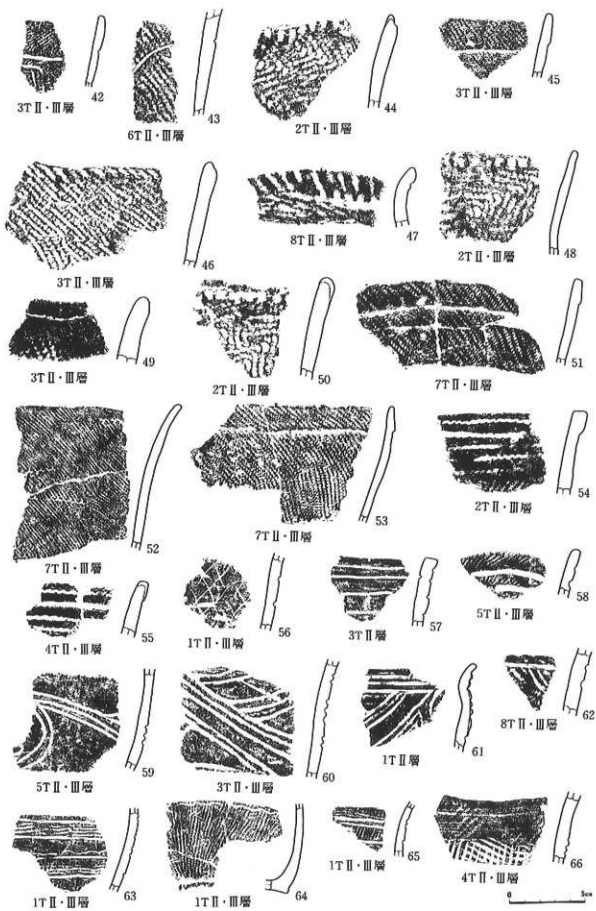


图27 B区遗物外出土器(3)

(3) 石器 (図28~30)

B区からは40点の石器が出土しているが、内訳は石鏃5点、石槍1点、石匙5点、石筈3点、不定形石器10点、磨製石斧1点、半月状扁平打製石器1点、敲磨器類11点、台石・石皿類2点、石錘1点となっている。調査区は全体の約27%にあたるが、石匙や石筈、不定形石器の出土率が高く、唯一出土した石錘もB区からの出土である。また全体で8点の出土があった磨製石斧は1点のみの出土であった。詳細は以下観察表に記載する。

表7 B区石器観察表

図版番号	トレンチ	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	器種	小分類	備考	発掘No
図28-1	1	カクニン	3.1	1.5	0.7	3.2	珪質	石鏃	Ⅱa	H 先端部欠損	55
図28-2	2(北)	ⅡⅢ	3.4	1.3	0.6	2.1	珪質	◇	Ⅱb		58
図28-3	3(中)	カクニン	4.0	1.4	0.7	3.2	珪質	◇	Ⅱa	II	62
図28-4	8	Ⅲ	3.2	1.6	0.6	2.1	珪質	◇	Ⅱb	先端部欠損	82
図28-5		Ⅲ	4.5	1.5	0.6	2.4	珪質	◇	Ⅱb		83
図28-6	1	廃土	11.9	3.3	1.1	37.3	珪質	石槍			56
図28-7	3(中)	ⅡⅢ	6.4	3.0	1.2	19.3	珪質	石匙	I	つまみ部・下部欠損	68
図28-8		ⅡⅢ	5.8	1.9	1.0	5.0	珪質	◇	I		70
図28-9	8	ⅡⅢ	6.5	2.8	1.1	11.9	珪質	◇	I	つまみ部欠損	84
図28-10		ⅡⅢ	5.6	3.0	1.2	19.3	珪質	◇	I	下部欠損	86
図28-11		ⅡⅢ	6.0	3.3	1.1	12.9	珪質	◇	I	下部欠損	87
図28-12	3(中)	ⅡⅢ	6.3	3.5	1.1	16.7	珪質	石匙	Ⅱ		63
図29-1	8	ⅡⅢ	9.1	4.5	2.2	87.4	珪質	◇	I		85
図29-2	8	ⅡⅢ	8.2	4.6	2.5	92.4	珪質	石筈	Ⅱ		88
図29-3	1	ⅡⅢ	7.9	6.8	2.0	71.7	珪質	不定形	Ⅱ		57
図29-4	2(南)	ⅡⅢ	2.7	2.6	0.6	3.8	珪質	◇	IV		60
図29-5	3(中)	ⅡⅢ	5.2	3.1	1.4	15.9	珪質	◇	Ⅲ		64
図29-6		ⅡⅢ	2.0	1.9	0.6	1.3	珪質	◇	I		65
図29-7		ⅡⅢ	3.3	1.2	0.5	2.0	珪質	◇	IV		66
図29-8		ⅡⅢ	3.3	1.1	0.9	1.6	玉珪	◇	IV		67
図29-9		ⅡⅢ	6.3	4.6	2.5	51.4	珪質	◇	I		69
図29-10	3(南)		5.3	4.0	1.6	30.7	珪質	◇	Ⅱ		77
図29-11		ⅡⅢ	3.9	2.7	0.5	2.4	珪質	◇	IV		78
図29-12	8	ⅡⅢ	4.8	1.6	1.0	4.4	珪質	◇	IV		89
図29-13	3(南)	カクニン	12.1	5.3	1.5	145.2	緑輝燧	磨製石斧		3 H (大型住居)	79
図29-14	3(中)	ⅡⅢ	13.9	6.5	3.4	474.1	ヒン	半月状扁平	Ⅲ		73
図29-15	2(中)	ⅡⅢ	6.9	7.0	2.9	186.9	凝灰	敲磨器類	Ⅳ		59
図29-16	2(南)	ⅡⅢ	7.5	4.9	3.2	133.4	凝灰	◇	IV	門石	61
図30-1	3(中)	ⅡⅢ	16.6	8.2	6.3	1210.6	凝灰	◇	Ⅲ		71
図30-2		ⅡⅢ	14.7	9.3	5.0	849.7	流紋	◇	Ⅱ		72
図30-3		ⅡⅢ	11.7	7.1	5.0	651.4	安山	◇	Ⅲ	北海道式石筈	75
図30-4	3(南)	Ⅲ	8.9	7.5	3.9	310.2	安山	敲磨器類	IV		80
図30-5		ⅡⅢ	19.5	7.8	5.7	1194.6	凝灰	◇	Ⅲ		81
図31-1		ⅡⅢ	11.6	7.5	4.3	429.8	流紋	◇	IV		110
図31-2	8	ⅡⅢ	8.9	4.8	4.7	281.6	凝灰	◇	IV		90
図31-3		ⅡⅢ	5.4	6.7	2.8	106.8	凝灰	◇	Ⅲ	東西小T	91
図31-4		ⅡⅢ	9.1	4.9	2.8	154.6	泥	◇	Ⅱ		111
図31-5	3(中)	ⅡⅢ	12.3	12.4	3.4	571.9	安山	石皿			76
図32-1	8	表I	25.3	28.6	9.6	8.6kg	◇				113
図32-2	3(中)	ⅡⅢ	9.3	9.6	1.7	254.7	凝灰	石錘			74

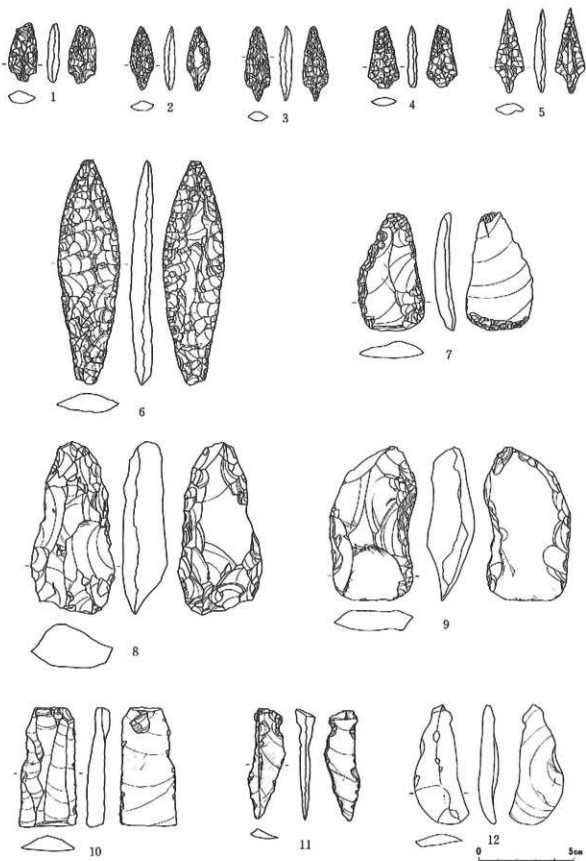


图28 B区遺構外出土石器(1)

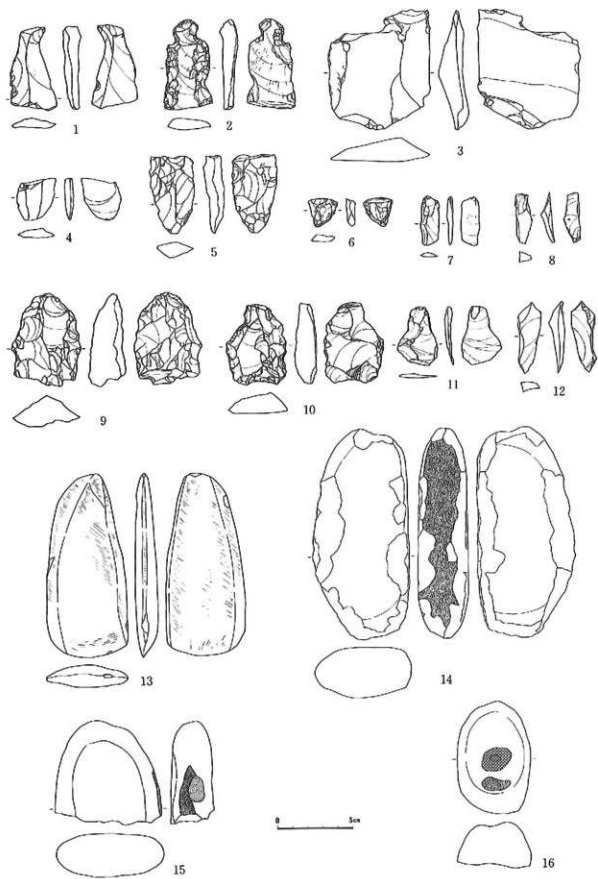


图29 B区遗物外出土石器(2)

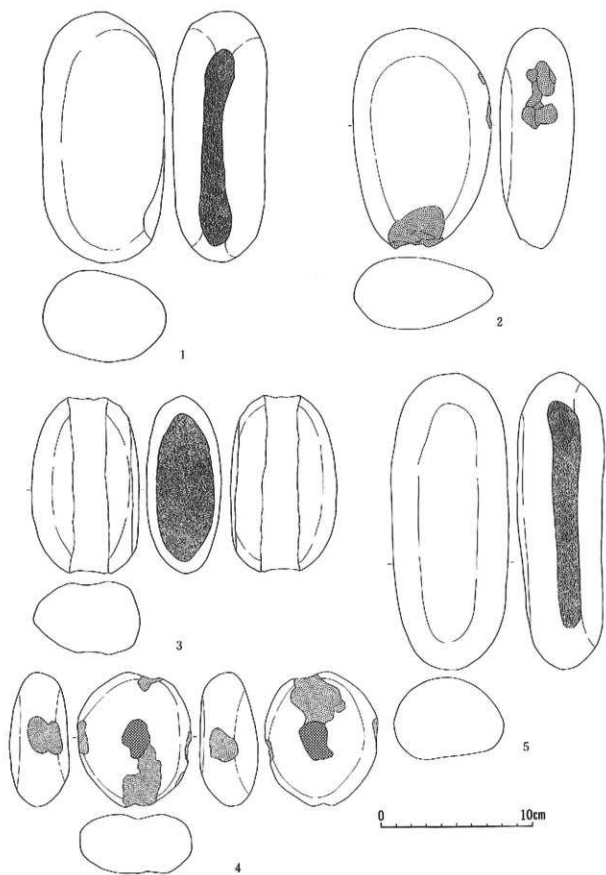


图30 B区遗物出土石器(3)

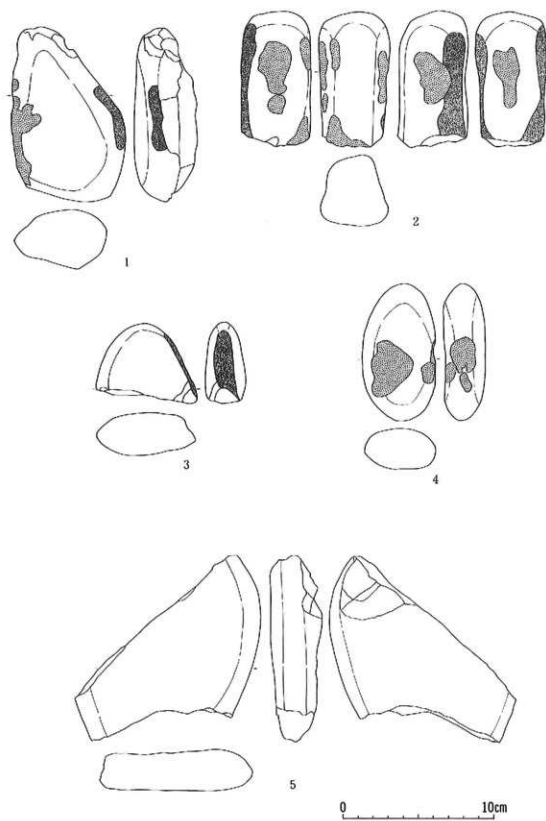
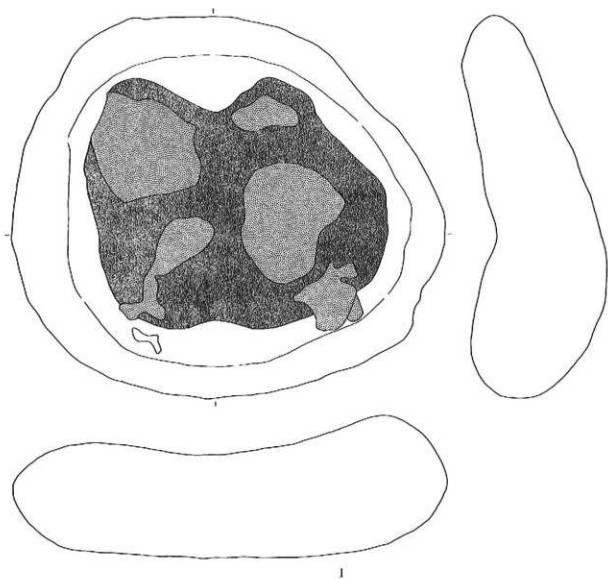
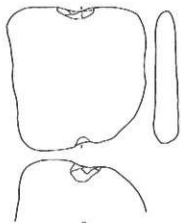


图31 B区遗址外出土石器(4)



1



2

0 10cm

图32 B区遗構外出土石器(5)

第3節 C区の検出遺構と出土遺物 (図34)

(1) 検出遺構 (図34)

C区全体で1,000㎡の面積を調査したところ、縄文時代中期の住居跡7軒、土坑・柱穴136基を確認した。

各トレンチごとの遺構確認数は以下の通りである。

No	住居跡	土坑・柱穴	その他	No	住居跡	土坑・柱穴	その他
1	1軒	23基		3	2軒	52基	
2	4軒	61基					

表8 C区遺構検出表

(2) 土器 図33-1

第Ⅲ群9類土器(縄文時代中期の粗製土器) 図33-1~7

形状は、6が底辺部であり他は胴部の深鉢形である。

1~3は縄文を施文し、4は横位方向に綾絡文・5は無文である。

時期は、1・4・7が円筒上層期であり、2・3・5は円筒上層期以降と思われる。

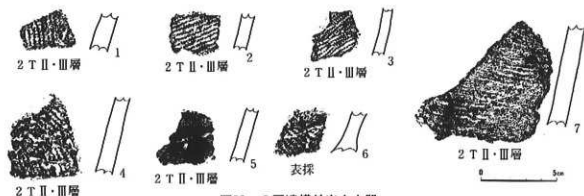


図33 C区遺構外出土土器

(3) 石器 (図35)

C区からは3点の石器が出土しているが、内訳は石鏃1点、石槍1点、磨製石斧1点となっている。

調査区自体も全体の12%程度だが、数量的にも器種的にも大変少ない出土状況であった。詳細は以下観察表に記載する。

表9 C区石器観察表

図版番号	トレンチ	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	器種	小分類	備考	整理No
図35-1	2	Ⅱ	3.7	1.5	0.7	3.3	珪質	石鏃	Ⅱb		92
図35-2		Ⅱ	13.8	3.8	1.2	52.7	珪質	石槍			115
図35-3		Ⅱ	9.2	4.7	1.8	111.7	粘板	磨製石斧			93

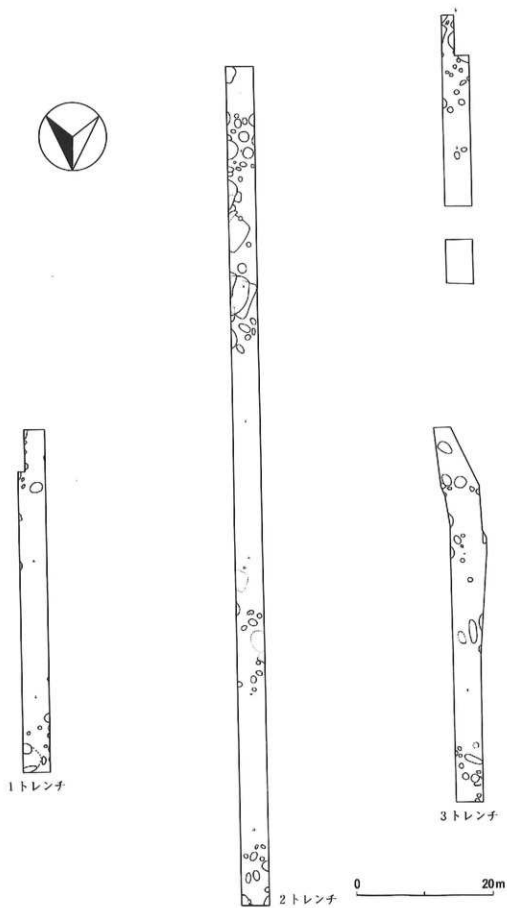


図34 C区調査区遺構

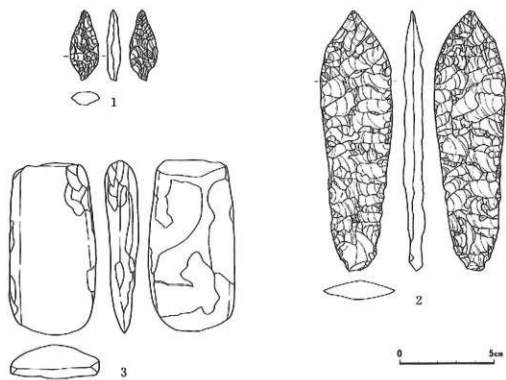


图35 C区遗物外出土石器

第4節 D区の検出遺構と出土遺物（図36～42）

(1) 検出遺構（図37～39）

D区全体で700㎡の面積を調査したところ、住居跡2軒、土坑・柱穴185基、配石遺構2基、盛土状遺構1基をそれぞれ確認した。

各トレンチごとの遺構確認数は以下の通りである。

No	住居跡	土坑・柱穴	その他	No	住居跡	土坑・柱穴	その他
1	0 軒	0 基		3	1 軒	78 基	配石遺構 2 基
2	0 軒	24 基		4	1 軒	83 基	盛土状遺構 1 基

表10 D区遺構検出表

3 トレンチ配石遺構（図38）

V B-189とV C-188・189・190・191グリッドに位置する。弧状を呈した配石が大きく2箇所に確認されたが、どちらも自然石を用いて構築されている。北側の配石の弧状の内部に小トレンチを数箇所設定し配石下部を調査したところ、土坑と思われる落込みを確認した。出土遺物から縄文時代中期の構築と考えられる。この配石遺構に近接する運動公園西駐車場からは、昭和51年の発掘調査で南北方向で2列に並ぶ土坑墓56基が検出されているが、この中のいくつかには配石遺構を伴うものがある。今回の試掘調査で検出された配石遺構もこの土坑墓列となんらかの関係があるものと推察される。

4 トレンチ盛土状遺構（図36・39）

V O-177グリッドに位置する。土層の観察を行ったところ、堆積の仕方が掘り込みに伴う自然堆積でなく人為的な堆積であると考えられることから、盛り土状の遺構であると考えられる。時期は出土遺物から縄文時代中期で、厚さ1mである。

土器（図36-1～4）

1は横位方向に絡状体を回転施し、2～4は横位の粘土紐間に連続刺突を施している。3は斜位・横位に粘土紐（素文）を貼り付けているものである。

時期は、1が円筒上層a式、2・3が円筒上層c式、4が円筒上層d式に相当すると思われる。

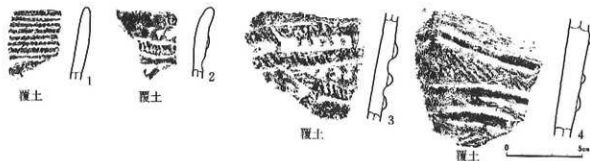
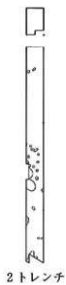


図36 D区盛土出土土器



0 20m



図37 D区調査区遺構

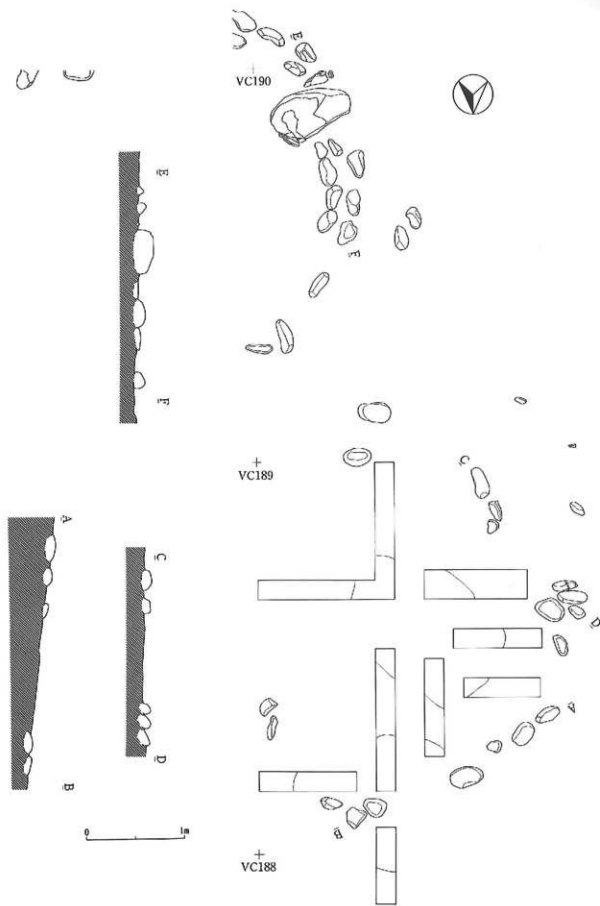
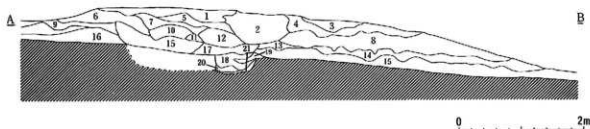


図38 D区3トレンチ配石遺構



D区4トレンチ盛土状遺構土層注記

- 第1層 黄褐色土 10YR5/6 しまり質。粘性弱。シルト的炭化物跡を、ロームブロック・瓦片有。
- 第2層 黄褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性弱。炭化物混入。本層多量。パリス粒少量。
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 しまり質。粘性弱。炭化物多量。パリス粒混入。
- 第4層 黒褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性弱。塊石有。炭化物多量。パリス粒少量。
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 しまり質。粘性弱。シルト質。パリス・炭化物混入。本層多量。
- 第6層 黒褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性弱。炭化物・本層有。パリス粒少量。暗褐色土混入。
- 第7層 黒褐色土 10YR2/2 しまり質。粘性有。本層混入。パリス粒多量。炭化物跡混入。
- 第8層 黄褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性強。本層多量。パリス粒混入。炭化物混入。
- 第9層 黄褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性有。パリス粒混入。炭化物跡混入。本層混入。
- 第10層 黄褐色土 10YR2/4 しまり質。粘性有。炭化物混入。パリス粒多量。暗褐色土混入。
- 第11層 黒褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性有。炭化物混入。パリス粒混入。本層混入。
- 第12層 黒褐色土 10YR2/2 しまり質。粘性強。炭化物跡混入。パリス粒混入。暗褐色土混入。
- 第13層 暗褐色土 10YR3/4 しまり質。粘性弱。炭化物跡混入。パリス粒混入。暗褐色土混入。
- 第14層 暗褐色土 10YR3/3 しまり質。粘性有。黒・黄褐色土混入。パリス粒混入。炭化物少量。
- 第15層 黄褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性有。炭化物多量。炭化物多量。パリス粒混入。
- 第16層 褐色土 10YR4/6 しまり質。粘性弱。シルト質。パリス粒混入。炭化物少量。
- 第17層 黒褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性弱。シルト質。パリス粒混入。炭化物混入。
- 第18層 黒褐色土 10YR2/3 しまり質。粘性弱。シルト質。炭化物混入。パリス粒混入。
- 第19層 褐色土 10YR4/4 しまり質。粘性弱。シルト質。
- 第20層 暗褐色土 10YR3/3 しまり質。粘性有。炭化物混入。
- 第21層 褐色土 10YR4/3 しまり質。粘性有。パリス粒混入。

図39 D区4トレンチ盛土状遺構

(2) 土器 (図40)

第II群2類土器 (円筒下層 a 式) 図40-2

形状は、平口縁で口頸部が内反する深鉢形である。

文様は、斜位に文様構成をおこなっている。

第II群3類土器 (円筒下層 d 式) 図40-3

文様は、横位方向に展開する絡条体・横及び縦位の摺糸圧痕・横位の摺糸圧痕を施文している。

第III群1類土器 (円筒上層 a 式) 図40-5~7

形状は、口頸部が内反する深鉢形である。文様は横位に摺糸圧痕を施文している。

第III群3類土器 (円筒上層 c 式) 図40-11

文様は、横位の粘土紐の貼り付け後に爪形文 (竹管状工具) を連続に施文している。

第III群4類土器 (円筒上層 d 式) 図40-8・9

形状は、平口縁と波状口縁の深鉢形である。

文様は、8が地文縄文地に粘上紐（素文）を貼り付けており、9が横位方向に粘土紐を貼り付けている。

第Ⅲ群5類土器（円筒上層c式）図40-12・13

形状は、波状口縁を呈する深鉢形である。

文様は、13が縦位に12が横位のモチーフの文様構成である。

第Ⅲ群6類土器（椀林式）図40-13・15-17

形状は、波状口縁を呈する深鉢形と橋状把手の壺形である。

文様は、17が頂端部に渦巻文・15が口唇部に横位沈線を巡らしている。16は橋状把手の垂下部に円形の刺突を施文している。

第Ⅲ群7類土器（最花式）図40-14

地文縄文地に長楕円文を施文しており、器表裏面にスス状炭化物が付着している。

第Ⅲ群9類土器（縄文時代中期の粗製土器）図40-1・18-23

18・19は、平口縁で口唇部寄りに燃糸圧痕を連続に施文している。1は、口唇部寄りにボタン状突起を貼り付けており、円筒上層期に担当すると思われる。

21-23は折り返し口縁の土器で21は縄文、23は無文である。最花式に相当すると思われる。

(3) 石器（図41・42）

D区からは11点の石器が出土しているが、内訳は石鏃4点、不定形石器1点、磨製石斧1点、敲磨器類4点、台石・石皿類1点となっている。4区の中で最も調査面積の少ないD区だが、石鏃の出土点数が面積の割に多いのが特徴として挙げられる。詳細は以下観察表に記載する。

表11 D区石器観察表

図版番号	トレンチ	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	器種	小分類	備考	整理No
図41-1	3	Ⅱ	3.4	1.5	0.6	2.5	珪質	石鏃	Ⅱb	配石付近 先端部欠損	95
図41-2		Ⅱ	4.0	1.5	0.4	1.7	珪質	*	I b	配石付近 先端部欠損	96
図41-3	3(南)	Ⅱ	4.2	1.2	0.7	2.8	珪質	*	Ⅱa	先端部欠損	97
図41-4		Ⅱ	4.8	1.9	1.0	5.2	珪質	*	Ⅱb		98
図41-5	2	ⅡⅢ	4.2	2.5	1.2	10.4	珪質	不定形	Ⅲ		94
図41-6	4	ⅡⅢ	3.7	5.5	2.7	61.5	石英安山	磨製石斧		大半欠損(刃部のみ)	103
図41-7	3	ⅡⅢ	6.5	5.2	3.4	135.0	安山	敲磨器類	Ⅲ		99
図41-8		ⅡⅢ	8.6	6.0	4.3	318.8	安山	*	Ⅲ		100
図41-9		ⅡⅢ	11.1	4.0	3.4	213.8	安山	*	Ⅱ		101
図42-1	4	ⅡⅢ	14.2	9.7	5.8	1056.5	凝灰	*	Ⅱ		104
図42-2	3	ⅡⅢ	16.0	11.5	3.8	844.4	石英安山	石皿			102

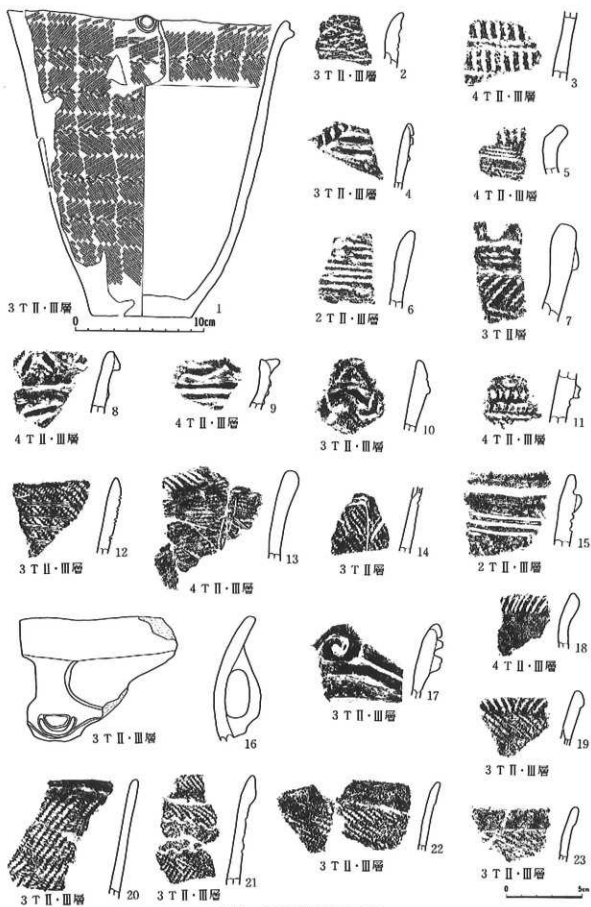


图40 D区遗物出土土器

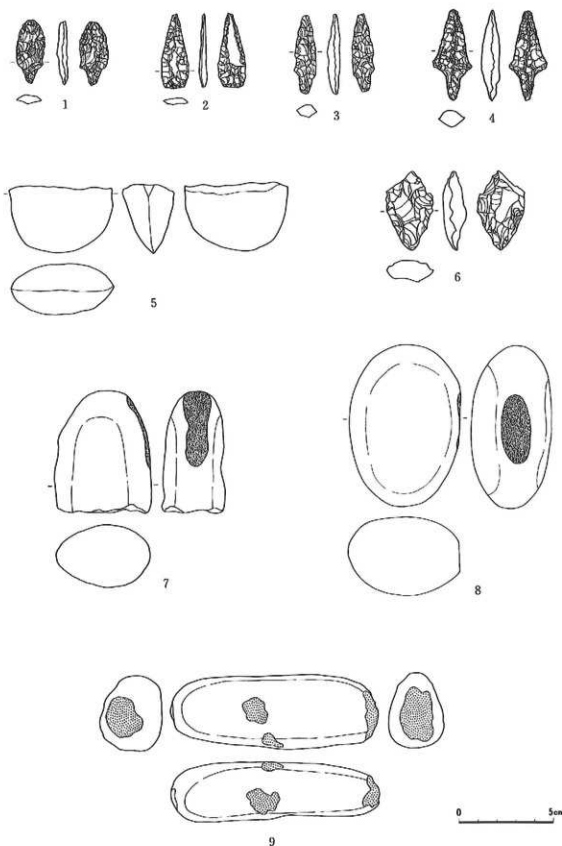
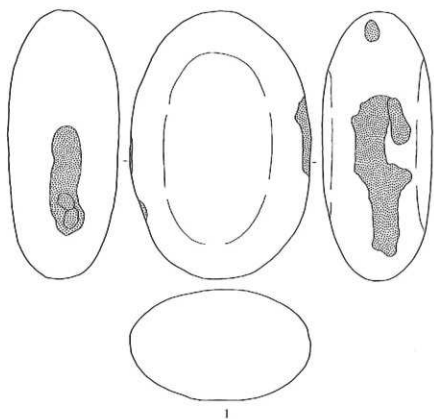
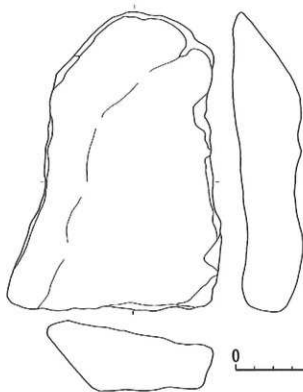


图41 D区遗物外出土石器(1)



1



2

0 10cm

图42 D区遺構外出土石器(2)

第4章 ま と め

1. 本調査区は、三内丸山(2)遺跡の西側の丘陵に位置し、対象面積は78,000㎡である。
2. 試掘調査面積は8,000㎡で、全体の10.3%を試掘調査した。
3. 試掘調査で確認できた遺構・遺物は下記のとおりである。

区	遺 構				遺 物	
	住居跡	土坑・柱穴	配石・盛土・溝・埋設	泥炭層	小計	土器・石器・木製品
A区	79軒	490基	3基	2基	574基	22箱
B区	21軒	340基	2基	1基	364基	13箱
C区	7軒	136基			143基	1箱
D区	2軒	185基	3基		190基	2箱
総数	109軒	1,151基	8基	3基	1,271基	38箱

4. 遺構・遺物の調査区毎の概要

〈A区〉調査区の北側で都市計画道路沿い部分

遺構 縄文時代中期住居跡・平安時代住居跡が、A区全面に分布している。

遺物 22箱

土器(縄文時代早期～晩期・弥生時代・平安時代)、石器(石鏃・石槍・石筥・石匙・不定形石器・磨製石斧・半円状扁平打製石器・敲磨器類・台石・石皿)が出土した。

[泥炭層] 2箇所検出

泥炭層 1は、縄文時代中期(円筒上層式)で厚さ2～3mである。

泥炭層 2は、縄文時代前期(円筒下層式)で厚さ30cmである。

〈B区〉近野遺跡運動公園の南側沢地

遺構 縄文時代中期・後期住居跡・埋設土器を検出した。住居跡は東側に多く分布し、重複がみられる。

遺物 13箱

土器(縄文時代前期～後期・弥生時代・平安時代)、石器(石鏃・石槍・石筥・不定形石器・石錘・磨製石斧・半円状扁平打製石器・敲磨器類・石皿)が出土した。

[泥炭層] 1箇所検出した。

泥炭層 3は、縄文時代前期・後期(十腰内I式)で厚さ2m以上である。

〈C区〉調査区の中央部分の自由広場である。

遺構 縄文時代中期住居跡・土坑を検出した。

遺物 1箱

土器(縄文時代中期)、石器(石鏃・石槍・敲磨器類)が出土した。

〈D区〉西駐車場の西側緩斜面部分

遺構 配石遺構・盛土状遺構を検出した。両遺構ともに縄文時代中期である。

遺物 2箱

土器(縄文時代前期・中期)、石器(石鏃・不定形石器・磨製石斧・石皿・敲磨器類)が出土した。

報告書抄録

ふりがな	さんないまるやま いせき							
書名	三内丸山(2)遺跡Ⅲ							
副書名	県総合運動公園拡張事業に係る試掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第185集							
編者名	成田滋彦・上野茂樹・内海剛							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL. 0177-88-5701							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		m ²	
さんないまるやま 三内丸山 (2)遺跡	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 おおいでひまひいあでまるやま 大字三内字丸山外	02201	021	40度 48分 40秒	40度 42分 20秒	19940411 ～1118	10,000	県総合運動 公園拡張整 備事業に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三内丸山 (2)遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡 109軒 土坑 1151基 埋設土器 4基 配石遺構 2基 盛土状遺構 1基	縄文土器(早期～晩期) 弥生土器 石器(石鏃・石槍・石 匙・石鏃・不定形石 器・磨製石斧・打製石 斧・石錘・半円状扁 平・敲磨器・石皿)		縄文時代中期の集 落跡が中心と考え られる。		

写 真 图 版





A区 調査区遠景



A区 1トレンチ遺物出土状況



A区 2トレンチ遺構確認



A区 2トレンチ2H確認



A区 2トレンチ埋設土器



A区 6トレンチ遺構確認



A区 8トレンチ遺構確認



A区 9トレンチ遺構確認

写真1 試掘調査(1)



B区 3トレンチ遺構確認



C区 2トレンチ遺構確認



C区 3トレンチ遺構確認



A区 8トレンチ1H完掘



A区 10トレンチ3H完掘



B区 1トレンチ遺構確認



D区 盛土状遺構



D区 配石遺構



D区 配石遺構

写真2 試掘調査(2)

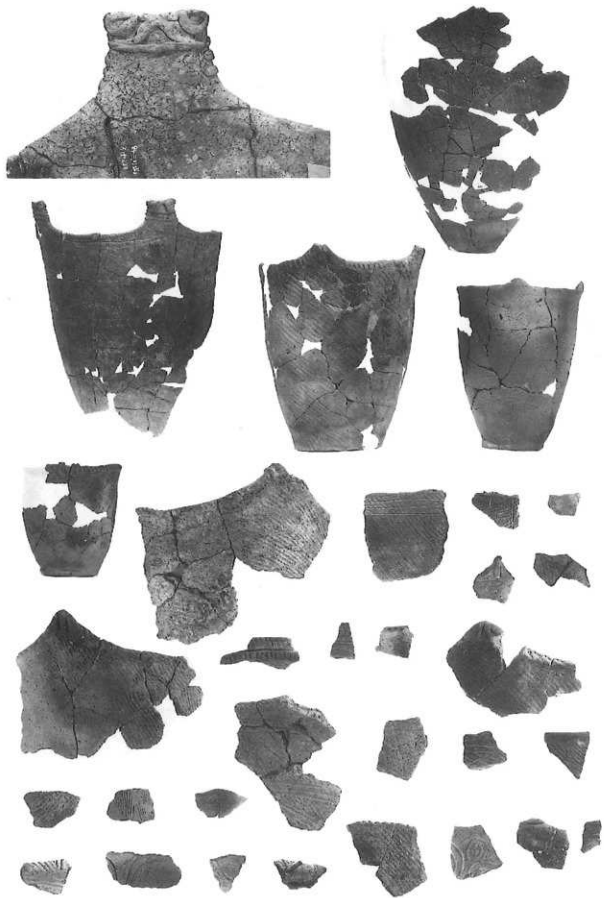


写真3 A区住居跡・埋設土器

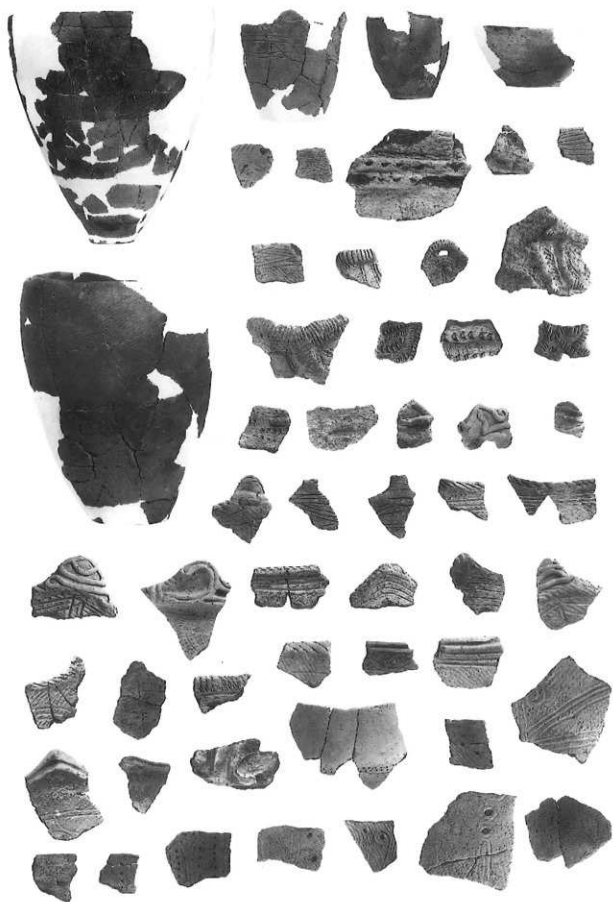
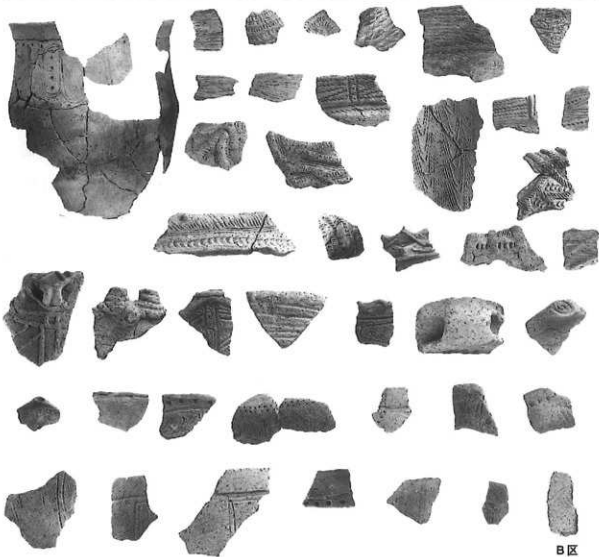


写真4 A区遺構外土器

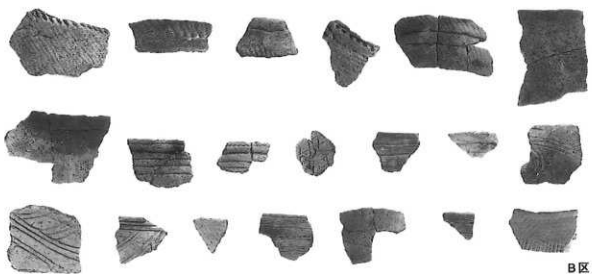


A区



B区

写真5 A・B区遺構外土器



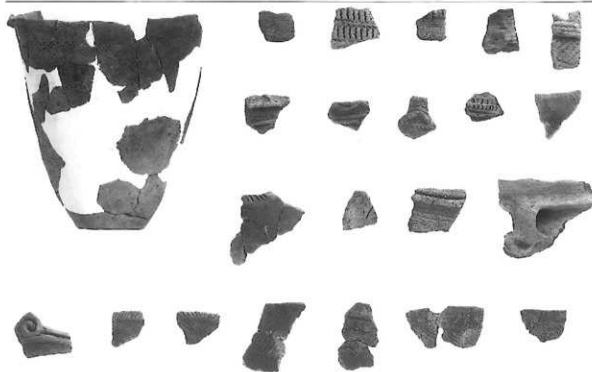
B区



C区



D区盛土

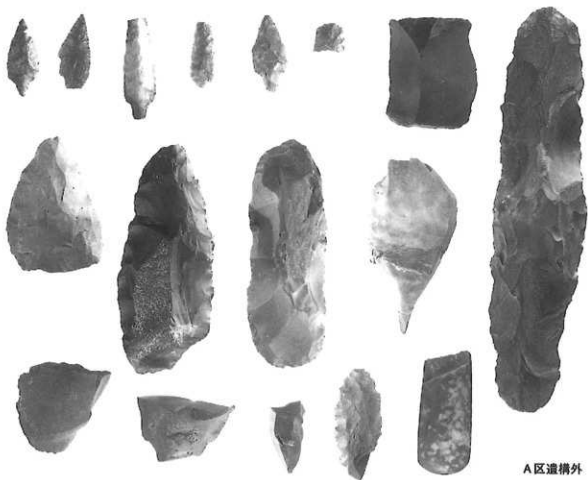


D区

写真6 B・C・D区遺構外、D区盛土土器



A区住居跡



A区遺構外

写真7 A区住居跡・遺構外石器

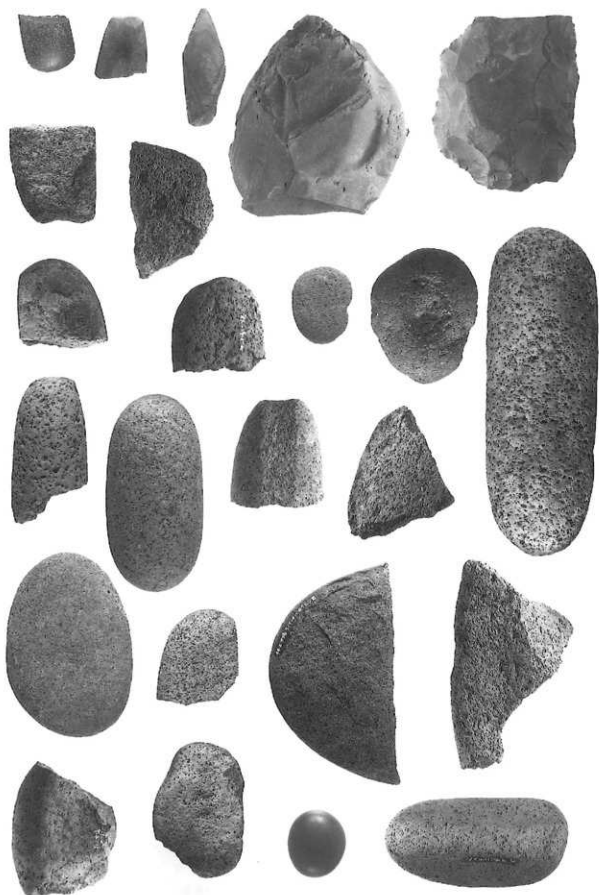
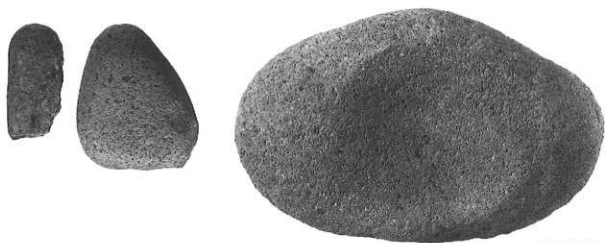
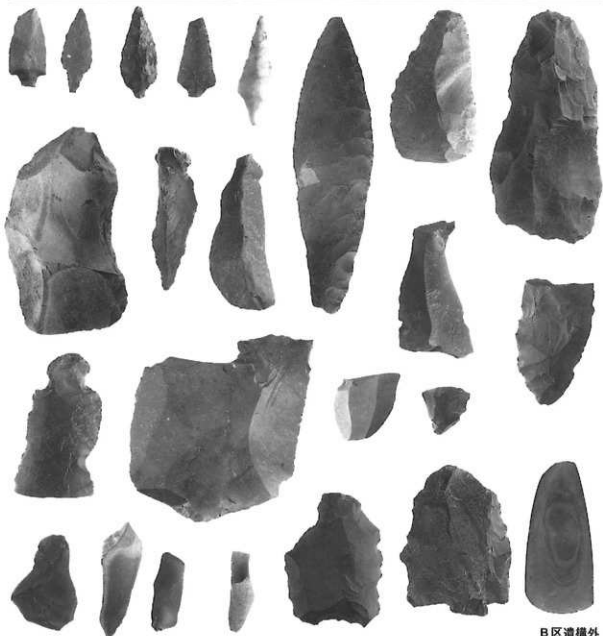


写真 8 A区遺構外石器



A区遗構外



B区遺構外

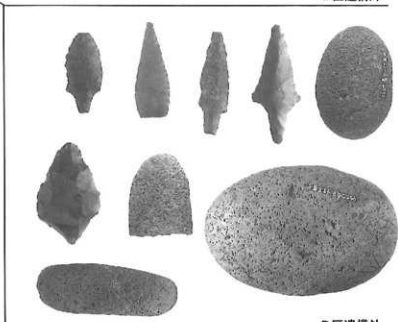
写真9 A・B区遺構外石器



B区遺構外



C区遺構外



D区遺構外

写真10 B・C・D区遺構外石器

青森県埋蔵文化財調査報告書第185集

三内丸山(2)遺跡Ⅳ

発行日 平成7年3月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市大字新城字天田内152-15

印刷所 東北印刷工業株式会社
〒030 青森市合浦一丁目2-12
